川南町文化財調査報告 4

KAMI NO HARU

上ノ原遺跡

1986. 3

宮崎県児湯郡川南町教育委員会

川南町文化財調査報告 4

KAMI NO HARU

上ノ原遺跡

1986. 3

宮崎県児湯郡川南町教育委員会

序

川南町は、宮崎県の中部に位置し、北の方には日向の歌人若山牧水の詠んだ麗峰尾鈴山を仰ぎ、東は名貫川で都農町、南は小丸川に沿って高鍋町、西は上面木山によって木城町と境している気候温暖な土地であり、1982年に行った遺跡詳細分布調査の結果、町内には段丘面を中心に旧石器時代～中・近世にわたる遺跡がひろく分布することがわかり、生活に適した土地だと思われます。東の台地には、円形周溝墓(1980年２月)、方形周溝墓(1981年３月)が発見され、県教委の協力により発掘調査も行なわれ、日向の古墳出現前夜の墓制を知るうえで貴重な資料として保存されています。西の台地には、千数百年前から、人が住み、かつての栄光を物語る川南古墳群(1961年３月国指定)があり、また、1578年島津、大友軍の争覇戦となった古戦場、敵味方の区別なく約7000の戦死者を祭る宗麟原供養塔(1933年２月国指定)もこの地にあります。

農業を基盤とする当町においては、農業の近代化に伴う大型機械の導入による深耕、大型鶏舎、豚舎の建設は埋蔵文化財の保護上から憂慮されることであり、先人がどのような生活をしてきたか解明することは難かしくなってきています。今回は、上ノ原遺跡を、県教育委員会の先生をはじめ、町文化財保護審議会委員、及び町内有志を中心に関係者の御協力をいただき発掘調査をいたしたのであります。調査の結果、弥生時代後期から終末期にかけての住居跡をはじめ縄文時代早期の集石遺溝等を検出するとともに約1500点の出土品を得たのであります。出土品は遠い昔を偲び、歴史を解明する貴重な財産として保管しその活用を図りたいと思います。

ここに報告書をまとめるにあたり、県教育委員会、調査員、御執筆御指導をいただきました方々、および土地所有者の横山千歳氏に厚くお礼を申し上げ序といたします。

1986年３月

川南町教育委員会　教育長　小　嶋　　進

例　　言

1．本書は、川南町教育委員会が調査主体となり国庫および県費補助を得て実施した上ノ原遺跡発掘調査の報告書である。

2．本書の執筆は、第Ⅰ章1を永友好典、第Ⅰ章2～第Ⅴ章を永友良典がそれぞれ行なった。

3．本書の作成に当たっては県文化課職員の協力があった。

4．本書の編集は、永友(良)・永友(好)があたった。

5．本書においては、方位は磁北である。またレベルは海抜絶対高である。

6．調査関係者は次のとおりである。

調査主体	川南町教育委員会	
	小嶋　進	教育長
	木内新一	社会教育課長
	河野健二	社会教育課補佐
	永友好典	社会教育課主事(調査担当)
	米田正直	〃
	吉村典道	〃
調査員	永友良典	県文化課主任主事
川南町文化財保護審議会委員	遠藤　学	
〃	永友芳弘	
〃	坂本敏明	
〃	河野庄次	
〃	村井格二	
〃	海野俊道	
遺物整理協力	増田慈子	荒武望恵
	荒木慶子	河野泰子
	富永優子	竹島典江
	溝口フサ子	野村涼子
	坂元清子	八木裕子

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　　説

1．調査の経過……1
2．遺跡の立地と環境……1
3．調査の概要……2
4．層　　序……11

第Ⅱ章　縄文時代の遺構と遺物

1．集石遺構……13
2．配石遺構……13
3．遺　　物……18

第Ⅲ章　弥生時代の遺構と遺物

1．1号住居跡……20
2．2号住居跡・6号住居跡……20
3．3号住居跡……24
4．4号住居跡……24
5．5号住居跡……30
6．溝状遺構……37

第Ⅳ章　古墳時代の遺構

1．56号墳周溝……38

第Ⅴ章　結　　語……39

挿　図　目　次

第１図　川南町遺跡分布図……3～4
第２図　川南古墳群分布図および上ノ原遺跡位置図……5～6
第３図　上ノ原遺跡遺構配置図……12
第４図　集石遺構実測図(1)(ＳＩ-3,4,5,6)……14
第５図　集石遺構実測図(2)(ＳＩ-2,7,8,9,13)……15
第６図　集石遺構実測図(3)(ＳＩ,10,14,15,16)および配石遺構実測図(ＳＩ-11,12)‥16
第７図　縄文時代出土遺物実測図……19
第８図　１号住居跡実測図および遺物出土状態図……21
第９図　１号住居跡出土遺物実測図……22
第10図　２号住居跡・６号住居跡実測図および遺物出土状態図……23
第11図　２号住居跡出土遺物実測図(1)……25
第12図　２号住居跡出土遺物実測図(2)……26
第13図　２号住居跡出土遺物実測図(3)……27
第14図　２号住居跡出土遺物実測図(4)……28
第15図　３号住居跡実測図および出土遺物実測図……29
第16図　４号住居跡実測図および出土遺物実測図……30
第17図　５号住居出土および周辺出土遺物実測図……31～32
第18図　５号住居跡遺物出土状態図……33
第19図　溝状遺構(ＳＥ-1,ＳＥ-2)実測図……34
第20図　ＳＥ-2土層断面図……34
第21図　ＳＥ-1遺物出土状態図……34
第22図　溝状遺構(ＳＥ-1,ＳＥ-2)出土土器実測図……35～36
第23図　56号墳周溝実測図および土層断面図……38

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景（南から）
　　遺跡近景（東から）
図版２　１号住居跡遺物出土状況
　　１号住居跡
図版３　２号住居跡遺物出土状況
　　２号住居跡
図版４　３号住居跡
　　４号住居跡
図版５　５号住居跡遺物出土状況
　　５号住居跡
図版６　溝状遺構（ＳＥ-１）遺物出土状況
　　溝状遺構（ＳＥ-１）
図版７　溝状遺構（ＳＥ-２）
　　56号墳周溝（北側）
図版８　集石遺構分布状況（b-5，c-3･4，d-3区）
　　集石遺構分布状況（d-4区）
図版９　２号集石（ＳＩ-２）
　　７号集石（ＳＩ-７）
図版10　３号集石（ＳＩ-３）
　　３号集石焼石堆積状況
図版11　６号集石（ＳＩ-６）
　　６号集石焼石堆積状況
図版12　９号集石（ＳＩ-９）
　　17号集石（ＳＩ-17）
図版13　１号配石（ＳＩ-11）
　　２号配石（ＳＩ-12）
図版14　縄文時代出土遺物
図版15　１号住居跡出土遺物
図版16　２号住居跡出土遺物(1)
図版17　２号住居跡出土遺物(2)
図版18　２号住居跡出土遺物(3)、３号住居跡出土遺物、
　　４号住居跡出土遺物、溝状遺構（ＳＥ-２）出土遺物

図版19　５号住居跡出土および周辺出土遺物
図版20　溝状遺構(ＳＥ-1)出土遺物

表　　目　　次

表１　遺跡地名表……７～11
表２　集石遺構一覧表……17

第Ⅰ章　序　　説

1．調 査 の 経 過

1985年７月、国指定史跡川南古墳群を包蔵する土地として周知されている地域に、横山千歳氏より畑の造成をする旨届け出があったので、県教育委員会に連絡をとった。造成については、土地所有者と協議し延期することができたが、造成による古墳周辺(46～50号・56号墳）が崩壊されるおそれ、又古墳群の一角に位置することから取り扱いには慎重な協議を重ねて発掘調査を実施することになった。

調査は1985年７月29日から当年10月25日までの約60日間で、川南町教育委員会が調査主体になり県教育委員会に調査員の派遣を依頼した。

調査員に県文化課主任主事、永友良典氏に担当してもらい、町社会教育課職員と文化財保護審議会委員が補助するとともに地元有志の協力を得て実施した。

尚、当古墳群に関する調査例は川南町文化財調査報告３に次ぎ二度目である。

2．遺跡の立地と環境

川南町は、西部の山地とその東麓から海岸にかけて広がる平坦な段丘面からなり、遺跡の分布は段丘上に多くみられる[(1)]。

旧石器時代から縄文時代早期の遺跡は山地及び山麓を中心にひろがり、一部は平田川流域にも形成されている。住吉Ｂ、丸山西原、旭ヶ丘、松ヶ迫、野田原、大久保の各遺跡で早期の山形押型文、楕円押型文土器が確認されている。丸山西原、旭ヶ丘の両遺跡では焼石等の出土から集石遺構が所在する可能性を持つ。込ノ口、霧島、虚空蔵免、大迫、丸山の各遺跡でも焼石の散布がみられる。尚、縄文前期～晩期の良好な遺跡は確認されていない。

弥生時代に入ると、前期の遺跡は確認されていないが、中期の下城式の土器等を出土する下ノ平、赤石、前原Ｂ等の遺跡が山麓の縁辺部にみられる。後期の遺跡としては、昭和29年調査の把言田遺跡[(2)]、昭和53年調査の中ノ迫Ａ遺跡[(3)]でそれぞれ住居跡を検出している。集落跡としては、そのほかにも丸山西原遺跡で11軒、下原遺跡で３軒、大迫遺跡で40余軒の住居跡プランが確認されている。古墳出現前の墓制として、周溝墓の分布がみられる。東平下Ａ遺跡では昭和55年に東平下１号円形周溝墓[(4)]、昭和56年に東平下２号円形周溝墓[(5)]の調査が行なわれている。また、丸山西原遺跡では周溝状遺構８基のプランが確認されているほか、大迫遺跡でも円形周溝墓が確認されている。後期の土器として櫛描波状文を口縁部に施した二重口縁壺などが出土している。後期の遺跡分布は舌状台地、台地中央部、台地縁辺部にそれぞれみられる。

古墳時代の遺跡としては、川南古墳群がある。小丸川中流域左岸の台地縁辺部に狭い範

囲で前方後円墳25基、方墳１基、円墳25基が分布する。特徴としては前方後円墳の占める割合が高い。造営の時期は過去の出土品等から５世紀から６世紀である。

小丸川下流域左岸の台地上にも弥生時代中期から古墳時代の遺跡が分布する。昭和56年調査の持田中尾遺跡[6]は持田古墳群の立地する台地の一角に位置し、弥生時代前期末～中期の土器を出土しており住居跡２軒が検出された。持田古墳は５世紀から６世紀にかけての造営で85基のうち10基が前方後円墳である。持田古墳群の東の台地上には、昭和54年調査の上別府遺跡[7]がある。６世紀を中心とした集落跡がひろがる。一方、小丸川を上った木城町でも昭和56年に横穴式石室をもつ永山古墳[8]が調査されている。

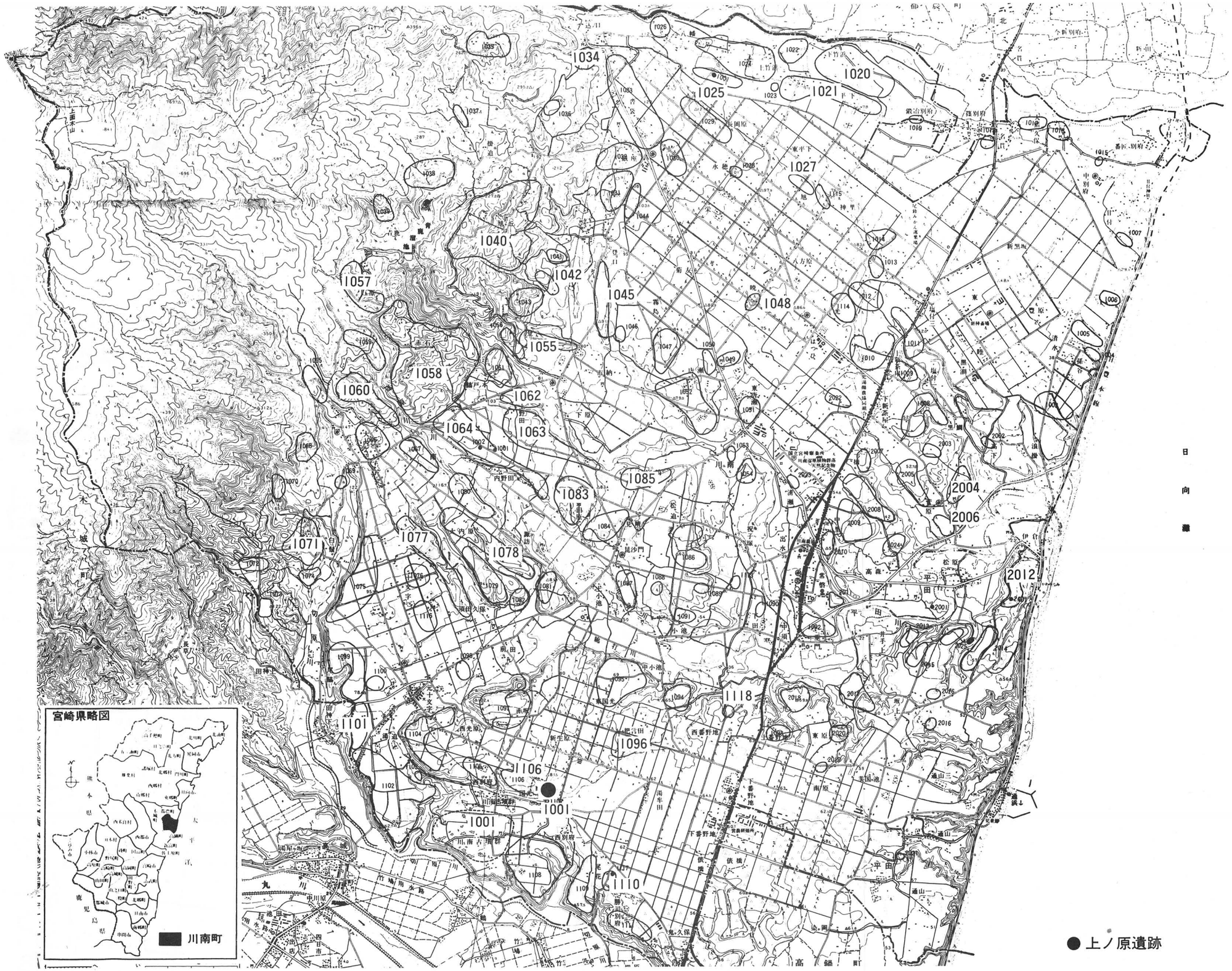
《註》

(1) 川南町教育委員会「川南町の文化財」（遺跡詳細分布調査報告書） 1983年
(2) 石川恒太郎「川南町把言田遺跡」（『宮崎県文化財調査報告書』第３輯） 1985年
(3) 宮崎県教育委員会「中ノ迫遺跡」（『宮崎県文化財調査報告書』第27集） 1985年
(4) 日高正晴「川南町東平下の円形周溝墓について」（『宮崎考古』第６集） 1980年
第11回埋蔵文化財研究会「西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題」 1981年
宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書第29集』収録予定
(5) 日高正晴・山中悦雄「東平下周溝墓群－２号方形周溝墓－」（『川南町文化財調査報告１』） 1982年
(6) 高鍋町教育委員会「持田中尾遺跡」 1982年
(7) 宮崎県教育委員会「上別府遺跡」（『お染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』）1979年
(8) 未報告

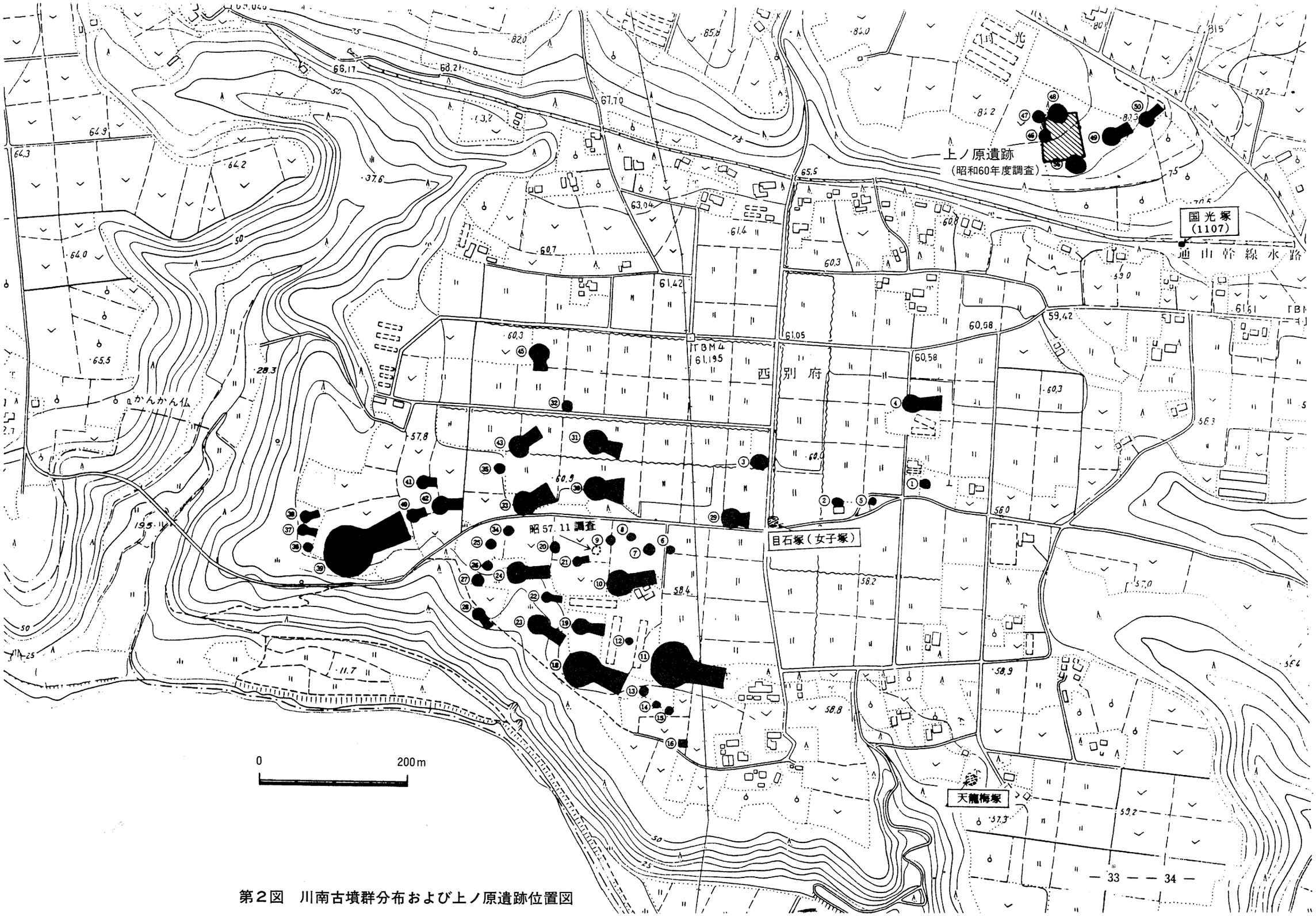
３．調査の概要

上ノ原遺跡は、小丸川左岸にひろがる標高80～90ｍの国光原段丘面南縁辺部に位置する。今回調査の地区は遺跡の東側にあたり川南古墳群46・48・56号墳に囲まれた約2000m²の畑地である。遺跡の南は標高50～60ｍの一段低い段丘面となっており、川南古墳群の主要分布地帯となっている。

調査は、まず表土を剥いでアカホヤ層上面での遺構検出を行った。遺構としては、竪穴式住居跡６軒、溝状遺構、および56号墳周溝が検出された。遺物としては、弥生式土器、石斧、すり石、石庖丁などが出土した。アカホヤ層上面の遺構確認後、アカホヤ層下位の調査を約600m²の範囲にわたって行った。無遺物層のアカホヤ層を重機で除去した後、黒褐色硬質土層を掘り下げていった。その結果、さらに下位の暗褐色硬質土層から集石遺構14基、配石遺構２基が検出され、遺物としては縄文式土器、石斧、すり石、石鏃、石匙、石鋸などが出土した。



第１図　川南町遺跡分布図（縮尺1/50000）



第２図　川南古墳群分布および上ノ原遺跡位置図

表1

遺跡地名表(1)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
1001	**川南古墳群**	**大字川南字西ノ別府ほか**	**古墳**	**古墳**
1002	川南村古墳	大字川南字北原ほか	古墳	古墳
1003	孫谷南(まごたにみなみ)遺跡	大字川南字孫谷南・孫谷	散布地	縄文～弥生
1004	孫谷(まごたに)遺跡	大字川南字孫谷・古坂	散布地	弥生
1005	古坂(ふるさか)遺跡	大字川南字古坂	散布地	縄文～古墳
1006	番匠(ばんしょう)A遺跡	大字川南字番匠	散布地	縄文～弥生
1007	番匠(ばんしょう)B遺跡	大字川南字番匠	散布地	弥生～古墳
1008	西原(にしばる)遺跡	大字川南字西原・黒鯛村上	散布地	縄文～弥生
1009	小迫(おさご)遺跡	大字川南字小迫	散布地	弥生
1010	向原(むこうばる)A遺跡	大字川南字向原・綱ヶ別府	散布地	縄文～弥生
1011	塩付(しおつけ)遺跡	大字川南字塩付・住田・東原	散布地	縄文～弥生
1012	向原(むこうばる)B遺跡	大字川南字向原・昭和	散布地	縄文～弥生
1013	昭和(しょうわ)遺跡	大字川南字昭和	散布地	弥生
1014	明原(あけばる)遺跡	大字川南字明原・昭和	散布地	弥生
1015	下肥(しもごやし)A遺跡	大字川南字下肥	散布地	縄文
1016	大猪久保(おおいのくぼ)遺跡	大字川南字大猪久保・岩下	散布地	弥生
1017	下肥(しもごやし)B遺跡	大字川南字下肥	散布地	弥生
1018	大塚山(おおつかやま)遺跡	大字川南字大塚山・中猪久保	散布地	縄文～古墳
1019	孫衛門(まごえもん)遺跡	大字川南字孫衛門	散布地	弥生
1020	**下ノ原(しものはる)遺跡**	**大字川南字下ノ原・形山下**	**散布地**	**縄文～弥生**
1021	**形山上(かたやまかみ)遺跡**	**大字川南字形山上・東平下**	**散布地**	**縄文～古墳**
1022	寺屋敷(てらやしき)遺跡	大字川南字寺屋敷・下ノ原上	散布地	弥生
1023	上ノ原北分(かみのはらきたわけ)A遺跡	大字川南字上ノ原北分	散布地	弥生～古墳
1024	古場山(こばやま)遺跡	大字川南字古場山・竹浜・狐塚下	散布地	弥生
1025	**上ノ原北分(かみのはらきたわけ)B遺跡**	**大字川南字上ノ原北分・上ノ原南分・狐塚下**	**散布地**	**弥生～古墳**
1026	八幡(はちまん)遺跡	大字川南字八幡	散布地	弥生
1027	**東平下(ひがしひらした)A遺跡**	**大字川南字東平下**	**弥生時代墓地**	**縄文～弥生**
1028	新耕原(しんこうばる)遺跡	大字川南字新耕原	散布地	弥生
1029	長岡原(ながおかばる)遺跡	大字川南字長岡原・沓袋原・上ノ原南分	散布地	弥生
1030	銀座(ぎんざ)遺跡	大字川南字銀座	散布地	弥生
1031	藏座村(ぞうざむら)遺跡	大字川南字藏座村・明野	散布地	縄文～弥生
1032	黒岩(くろいわ)遺跡	大字川南字黒岩・明野・黒岩北	散布地	縄文～弥生
1033	沓袋畑(くつふくろばた)遺跡	大字川南字沓袋畑・前田・込ノ口土尻	散布地	弥生～古墳

遺跡地名表(2)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
1034	**込ノ口遺跡**（おろのくち）	**大字川南字沓袋畑・村上**	**散布地**	**縄文～古墳**
1035	村上A遺跡（むらかみ）	大字川南字村上	散布地	縄文～弥生
1036	乗越遺跡（のりこし）	大字川南字乗越	散布地	縄文～弥生
1037	村上B遺跡（むらかみ）	大字川南字村上・掛迫中	散布地	縄　文
1038	南牧原遺跡（みなみまきばる）	大字川南字南牧原	散布地	縄文～古墳
1039	青鹿遺跡（せいろく）	大字川南字青鹿	散布地	縄文～弥生
1040	**旭ヶ丘遺跡**（あさひがおか）	**大字川南字旭ヶ丘・市納上**	**散布地**	**先土器～古墳**
1041	山ノ口遺跡（やまのくち）	大字川南字山ノ口	散布地	弥　生
1042	**谷ノ口遺跡**（たにのくち）	**大字川南字谷ノ口・蟻ノ草**	**散布地**	**先土器～弥生**
1043	市納上遺跡（いちなわかみ）	大字川南字市納上	散布地	縄文～弥生
1044	山本遺跡（やまもと）	大字川南字山本	散布地	縄文～弥生
1045	**霧島遺跡**（きりしま）	**大字川南字霧島**	**集落跡**	**縄文～弥生**
1046	葛掛原遺跡（くつかけばる）	大字川南字葛掛原	散布地	縄文～弥生
1047	豊坂遺跡（とよさか）	大字川南字豊坂・葛掛原	墳　墓	縄文～弥生
1048	**香田原遺跡**（こうだばる）	**大字川南字香田原・北唐瀬**	**集落跡**	**弥　生**
1049	道東遺跡（みちひがし）	大字川南字道東・北唐瀬	散布地	弥生～古墳
1050	北原遺跡（きたばる）	大字川南字北原・道西	散布地	縄文～弥生
1051	唐瀬東原遺跡（からせひがしばる）	大字川南字唐瀬東原・道東	散布地	弥　生
1052	弥次郎遺跡（やじろう）	大字川南字弥次郎・葛掛原・豊坂・登り口東原・西牟田	集落跡	弥　生
1053	下唐瀬遺跡（しもからせ）	大字川南字下唐瀬	散布地	縄文～弥生
1054	焼山遺跡（やきやま）	大字川南字焼山	散布地	弥　生
1055	**虚空蔵免遺跡**（こくぞうめん）	**大字川南字虚空蔵面・幟立**	**散布地**	**縄文～弥生**
1056	幟立遺跡（のぼりたて）	大字川南字幟立	散布地	縄文～弥生
1057	**椎原遺跡**（しいばる）	**大字川南字椎原**	**散布地**	**先土器～弥生**
1058	**赤石遺跡**（あかいし）	**大字川南字赤石・鵜戸ノ本・境谷下**	**散布地**	**縄文～古墳**
1059	住吉A遺跡（すみよし）	大字川南字住吉	散布地	縄文～古墳
1060	**住吉B遺跡**（すみよし）	**大字川南字住吉**	**散布地**	**先土器～弥生**
1061	天神本遺跡（てんじんもと）	大字川南字天神本・赤石・鵜戸ノ本	散布地	縄文～弥生
1062	**丸山遺跡**（まるやま）	**大字川南字丸山・丸山西原**	**散布地**	**縄文～弥生**
1063	**丸山西原遺跡**（まるやまにしばる）	**大字川南字丸山西原**	**集落跡**	**縄文～弥生**
1064	**野田原遺跡**（のだばる）	**大字川南字北原**	**散布地**	**縄文～弥生**
1065	宮ノ原遺跡（みやのはる）	大字川南字宮ノ原・井手ノ本	散布地	縄文～古墳
1066	大内遺跡（おおうち）	大字川南字大内・丸尾	散布地	弥　生

遺跡地名表(3)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
1067	丸尾遺跡	大字川南字丸尾・綿打上	散布地	弥生
1068	白鬚原遺跡	大字川南字白鬚原・西ヶ谷	散布地	縄文～弥生
1069	萱根遺跡	大字川南字萱根	散布地	弥生
1070	龍ヶ脇遺跡	大字川南字龍ヶ脇・白鬚	散布地	縄文～弥生
1071	**白鬚遺跡**	**大字川南字白鬚**	**散布地**	**先土器～古墳**
1072	萩原A遺跡	大字川南字萩原	散布地	縄文～古墳
1073	萩原B遺跡	大字川南字萩原	散布地	縄文～弥生
1074	火ノ口遺跡	大字川南字火ノ口・白鬚	散布地	縄文～古墳
1075	下原遺跡	大字川南字下原・星松原・大久保原・金六松	古墳	弥生～古墳
1076	大久保原A遺跡	大字川南字大久保原	墳墓	弥生
1077	**大迫遺跡**	**大字川南字大迫・下東**	**集落跡**	**弥生**
1078	**中ノ迫A遺跡**	**大字川南字中ノ迫・綿打**	**集落跡**	**弥生**
1079	中ノ迫B遺跡	大字川南字中ノ迫	散布地	弥生
1080	綿打上A遺跡	大字川南字綿打上	散布地	弥生
1081	綿打上B遺跡	大字川南字綿打上	散布地	弥生
1082	須田久保遺跡	大字川南字須田久保・中ノ迫	散布地	弥生
1083	**松ヶ迫A遺跡**	**大字川南字松ヶ迫**	**散布地**	**縄文～弥生**
1084	松ヶ迫B遺跡	大字川南字松ヶ迫	散布地	縄文～弥生
1085	**樋風呂遺跡**	**大川川南字樋風呂**	**散布地**	**先土器～古墳**
1086	山道遺跡	大字川南字山道・蛇ヶ牟田・下原	散布地	弥生
1087	昆沙門遺跡	大字川南字北原・笹ヶ山	散布地	弥生～古墳
1088	笹ヶ山遺跡	大字川南字笹ヶ山・北原	散布地	弥生
1089	蛇ヶ牟田遺跡	大字川南字蛇ヶ牟田	散布地	弥生
1090	中原遺跡	大字川南字中原・仲原・下原	散布地	縄文～弥生
1091	新屋敷遺跡	大字川南字新屋敷	散布地	縄文～弥生
1092	垂門遺跡	大字川南字垂門・大字平田字垂門	散布地	弥生～奈良
1093	番野地A遺跡	大字川南字番野地	散布地	弥生
1094	番野地B遺跡	大字川南字番野地	散布地	弥生
1095	東国光遺跡	大字川南字東国光・把言田・山下・道上	散布地	弥生
1096	**把言田遺跡**	**大字川南字把言田**	**集落跡**	**弥生**
1097	前ノ田村遺跡	大字川南字前ノ田村南・前ノ田村西・西国光	散布地	弥生
1098	前ノ田村上遺跡	大字川南字前ノ田村上	散布地	弥生
1099	持ノ木遺跡	大字川南字持ノ木・前久保・金六松	散布地	縄文～弥生

遺跡地名表

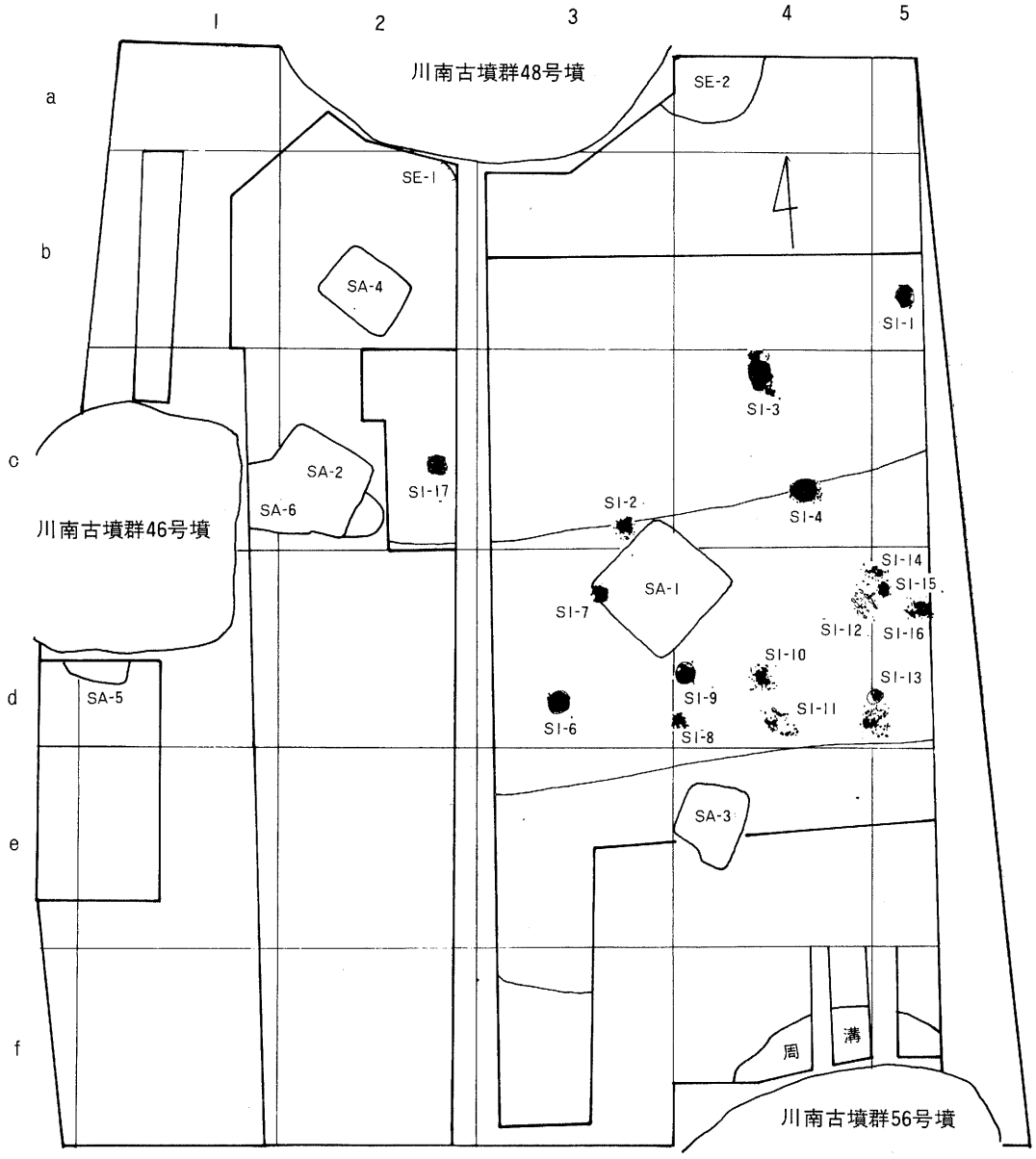
遺跡名称	名称	所在地	種類	時代
1100	前原A遺跡	大字川南字前原・持ノ木	散布地	弥生～古墳
1101	**前原B遺跡**	**大字川南字前原**	**集落跡**	**弥生**
1102	湯迫遺跡	大字川南字湯迫・新湯迫	散布地	縄文～古墳
1103	新湯迫遺跡	大字川南字新湯迫・地蔵谷	散布地	縄文～古墳
1104	西国光A遺跡	大字川南字西国光	散布地	弥生
1105	西国光B遺跡	大字川南字西国光	散布地	弥生～古墳
1106	**上ノ原遺跡**	**大字川南字上ノ原**	**散布地**	**弥生～古墳**
1107	国光塚古墳	大字川南字国光	古墳	古墳
1108	天神前遺跡	大字川南字天神前・蟻ノ別府・国光	散布地	弥生～古墳
1109	尾花A遺跡	大字川南字尾花坂上・尾花西平・角谷提尻	散布地	弥生～古墳
1110	**尾花B遺跡**	**大字川南字尾花坂上・尾花坂平**	**古墳・集落跡**	**弥生～古墳**
1111	勝司ヶ別府遺跡	大字川南勝司ヶ別府・勝司ヶ別府南・鬼ヶ久保	散布地	弥生～古墳
1112	鬼ヶ久保遺跡	大字川南字鬼ヶ久保	散布地	弥生～古墳
1113	祝子塚遺跡	大字川南字下原	散布地	弥生
1114	光遺跡	大字川南字光・昭和	散布地	弥生
1115	東平下B遺跡	大字川南字東平下	散布地	弥生
1116	大久保原B遺跡	大字川南字大久保原	散布地	弥生
1117	尾花塚古墳	大字川南字尾花坂上	古墳	古墳
1118	**番野地C遺跡**	**大字川南字番野地**	**散布地**	**先土器**
2001	川南古墳	大字平田字大久保ほか	古墳	古墳・江戸
2002	高下遺跡	大字平田字高下	散布地	弥生
2003	岩ノ下遺跡	大字平田字岩ノ下・大字川南字板唐瀬	散布地	弥生
2004	**卒手遺跡**	**大字平田字卒手**	**散布地**	**先土器～古墳**
2005	鍛治尾敷遺跡	大字平田字鍛治屋敷・広野地	散布地	縄文～古墳
2006	**萌牟田遺跡**	**大字平田字萌牟田**	**散布地**	**縄文～弥生**
2007	狐尾遺跡	大字平田字狐尾	散布地	縄文～弥生
2008	野稲尾遺跡	大字平田字野稲尾・岩坪	散布地	縄文～弥生
2009	後牟田遺跡	大字平田字後牟田	散布地	縄文～古墳
2010	仏坂A遺跡	大字平田字仏坂	散布地	弥生～古墳
2011	白坂谷遺跡	大字平田字垂門	散布地	弥生
2012	**大久保遺跡**	**大字平田字大久保**	**散布地**	**先土器～弥生**
2013	井手ノ上村遺跡	大字平田字井手ノ上村	散布地	縄文～弥生
2014	大牟田遺跡	大字平田字大牟田・妻ノ木	散布地	縄文～弥生

遺跡地名表(5)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
2015	伊弥ヶ谷遺跡	大字平田字伊弥ヶ谷	散布地	縄文～弥生
2016	牧ノ内遺跡	大字平田字牧ノ内	散布地	弥生
2017	猫ヶ谷遺跡	大字平田字猫ヶ谷	散布地	縄文～弥生
2018	南原A遺跡	大字平田字南原	散布地	縄文～弥生
2019	南原B遺跡	大字平田字南原	散布地	弥生
2020	陰ノ木遺跡	大字平田字陰ノ木・猫ヶ谷	散布地	縄文～弥生
2021	平鈴遺跡	大字平田字平鈴	散布地	弥生
2022	綱ヶ別府遺跡	大字平田字綱ヶ別府	散布地	弥生
2023	堤牟田遺跡	大字平田字堤牟田	散布地	弥生～古墳
2024	仏坂B遺跡	大字平田字仏坂・宮ノ本・岩坪・後牟田	散布地	弥生
2025	古場A遺跡	大字平田字古場	散布地	弥生
2026	古場B遺跡	大字平田字古場・妻ノ木	散布地	弥生

4．層序

上ノ原遺跡は、全体的に北から南へ向って傾斜している。以前はみかん畑であったが、現在は飼料畑として利用されている。そのため、全面がアカホヤ層まで削平されているうえに肥料用の溝が南北方向に40～50m間隔でアカホヤ層の下まで掘り込んである。遺跡の基本層序は、0層～耕土(約10cm)、II層～アカホヤ層(約10cm)、III層～黒褐色硬質土層(約15cm)、IV層～暗褐色硬質土層(約20cm)である。弥生時代終末期～古墳時代の遺構がIV層まで掘り込んである。また、IV層からは縄文時代早期の土器を伴う集石遺構を検出した。



SA……竪穴住居跡
SI ……集石遺構および配石遺構
SE……溝状遺構

第3図　上ノ原遺跡遺構配置図（縮尺1/200）

第II章　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の文化層は第III層（暗褐色硬質土層）で確認された。調査は10m×10mグリッドのうちD-3，4，5，C-2，3，4，5，d-3，4，5区の約600m²の範囲で行なった。遺構としてはd-3，4，5区を中心に集石遺構14基、配石遺構2基を検出した。

1．集　石　遺　構（第4図～第6図）

検出された集石遺構は構造上から次のように分類できる。なお、集石遺構を構成する礫は拳大の角礫が中心で、いずれも火を受けて赤く変色している。

Ⅰa類…直径約100cm、深さ約30cmで円形の皿状土坑（掘り込み）を持つタイプで拳大の焼角礫が土坑内に密に入っている。埋土および壁面に多量の炭化物が検出できる。焼土は確認できない。（S1-1，3，4，6，17）

Ⅰa′類…Ⅰa類のうちS1-3，4，17は集石上面にかなりの散石（約2m四方）の分布を持つ。

Ⅰb類…直径約100cm、深さ約20cmで円形の皿状土坑を持つ。人頭大の川原石が土坑の縁辺に配置されている。その中に拳大の焼角礫が遺存する。炭化物、焼土は検出されない。（S1-9～配石は土坑の西縁に4個遺存する。焼けている。）

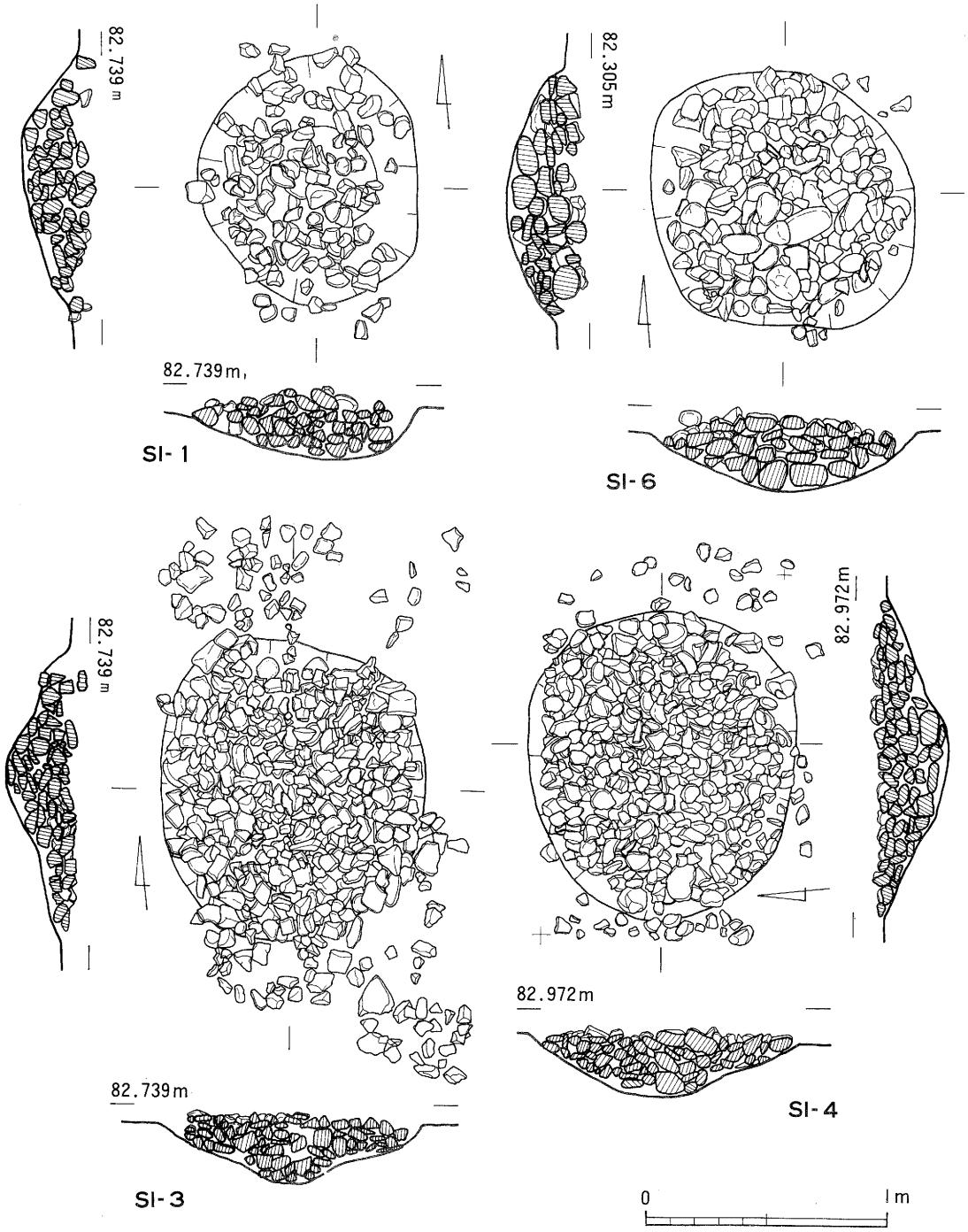
Ⅰc類…直径約80cm、深さ約20cmでやや変形した円形皿状土坑を持つ。土坑内には拳大の焼角礫が多少遺存する。炭化物、焼土は検出されず。（S1-13）

IIa類…皿状土坑を持たず拳大の焼角礫が径約70cmの範囲に密集する。炭化物、焼土は検出されず。（S1-2，7，8，10，14，16）

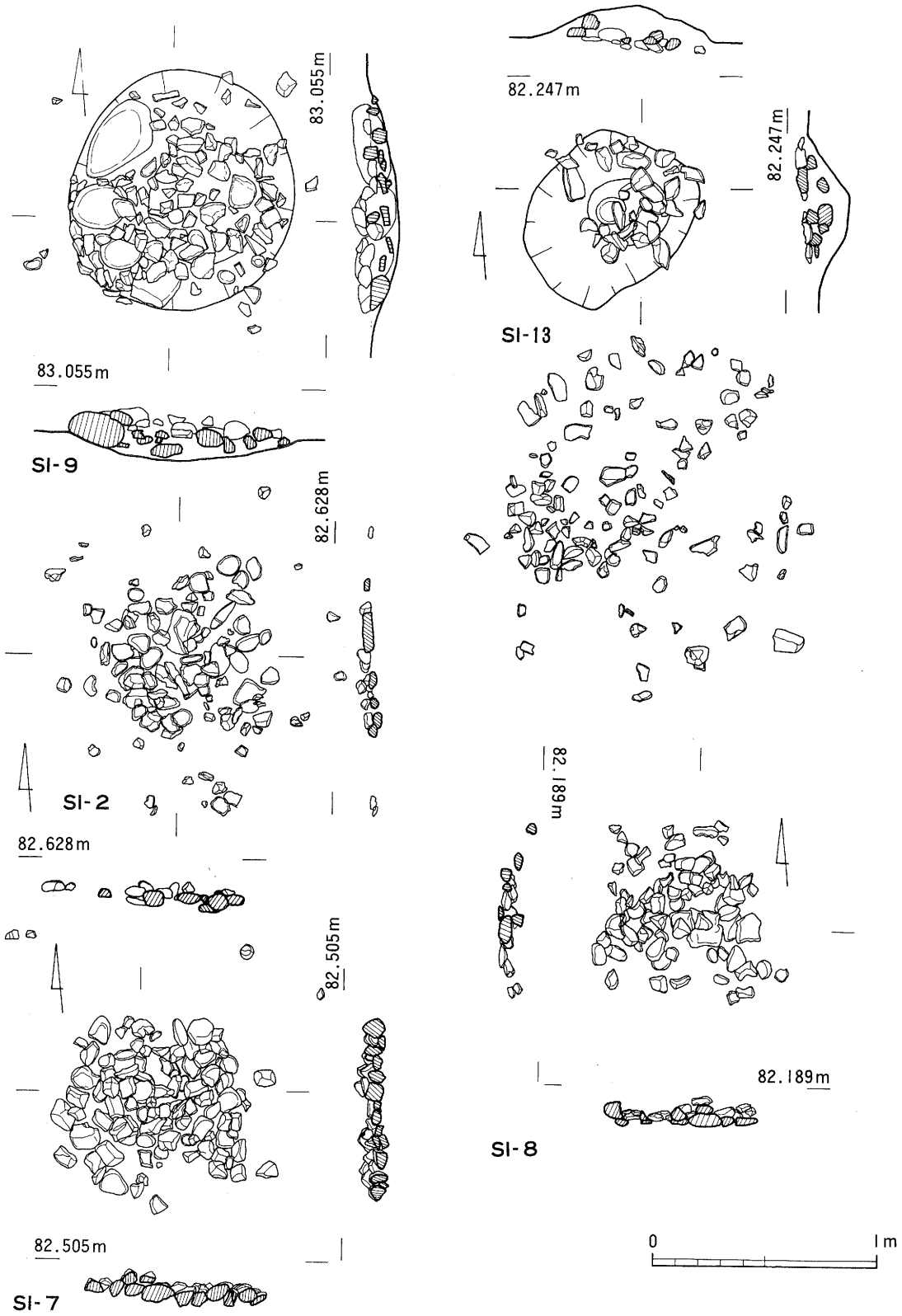
IIc類…IIa類と比べると礫の密集度は低く雑然と遺存する。（S-15）

2．配　石　遺　構（第6図）

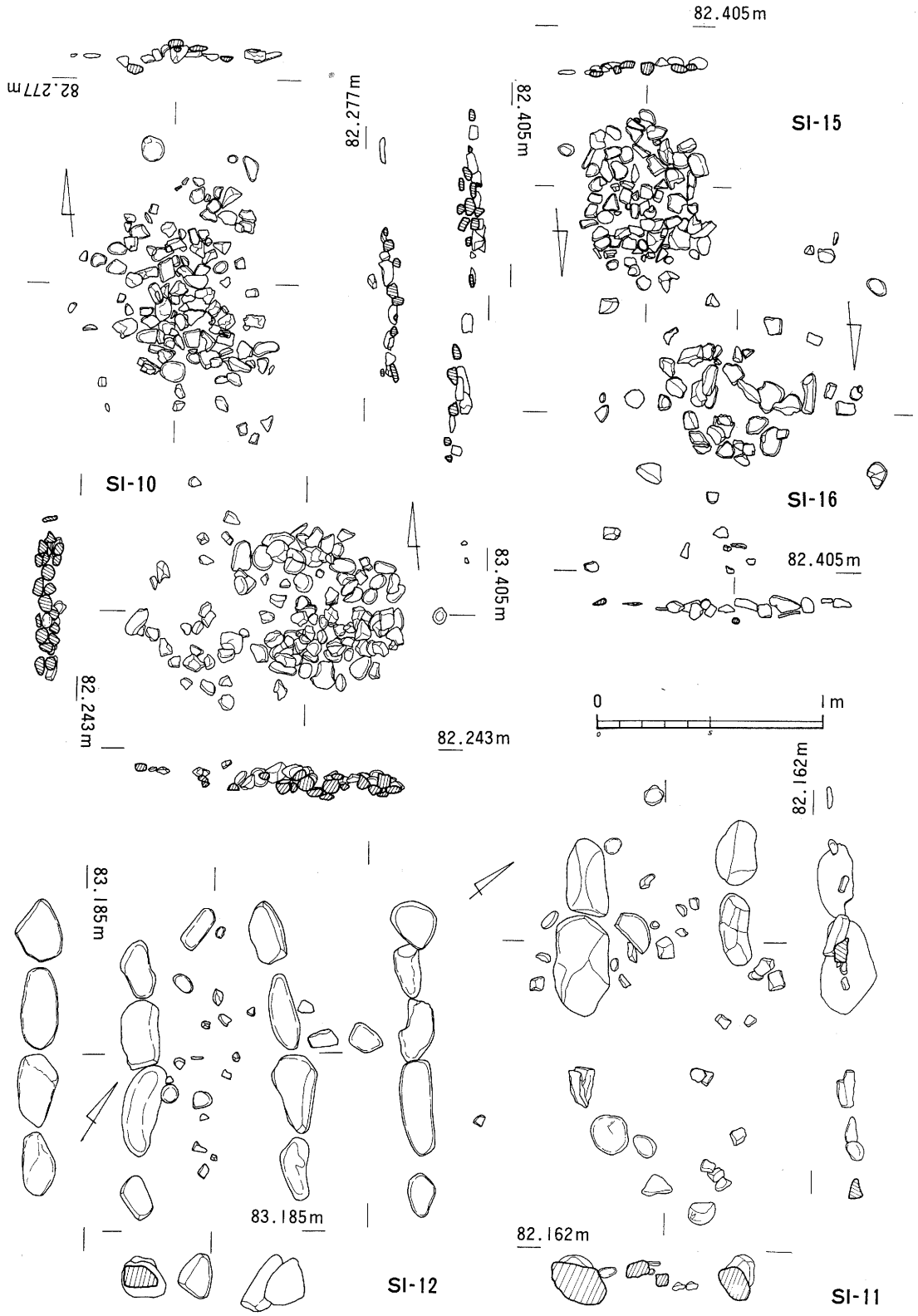
集石遺構同様、第III層の縄文文化層で検出された。d-4区を中心に2基が分布、構造は、人頭大（30～50cm）の川原石をコの字型に配置する。完全に残る1号配石（SⅠ-12）をみると、長軸方向に川原石を4個ずつ、短軸方向にひとつの計9個を構成礫として使用、その規模は130cm×90cmを測る。配石内には約0.6m²のスペースがあるが掘り込み面、炭化物、焼土等は認められなかった。しかし、川原石自体は火を受けたらしく赤変しており、拳大の焼礫が配石の内外に何点か点散していた。機能としては、囲い炉的な役割を考える必要があると思われる。北隣にはSⅠ-14，SⅠ-15と掘り込みを持たない集石がみられ、配石遺構との関連も考えられる。主軸はN-30°-Wである。2号配石は、両側の2個ずつしか残存しておらず、他の川原石の何個かは周辺にみられる。廃棄されたことも考えられる。主軸はN-40°-W。



第４図　集石遺構実測図(SI-1,3,4,6)（縮尺1/30）



第５図　集石遺構実測図(SI-2,7,8,9,13)（縮尺1/30）



第6図　集石遺構(SI-10,14,15,16)および配石遺構(SI-11,12)実測図 (縮尺1/30)

表2

集石遺構一覧表

集石番号	大きさ(cm) 長径×短径	大きさ(cm) 深さ・厚み	掘り込み	分布位置(グリッド)	焼石の疎密	焼石の大きさ	角礫 丸礫	配石	焼土	炭化物	遺物	備考
SI-1	100× 95	30	有(円形)	b−5	密	拳大	角礫	—	—	—	—	
SI-2	80× 70	10	—	c−3	やや密	〃	〃	—	—	—	—	
SI-3	120×110	30	有(円形)	c−4	密	〃	〃	—	—	有	押型文(楕円)	周辺部に多量の散石
SI-4	130×110	30	有(円形)	c−4	密	〃	〃	—	—	有	—	〃
SI-6	110×105	30	有(円形)	c−5	密	〃	〃	—	—	—	—	
SI-7	80× 80	10	—	d−3	やや密	〃	〃	—	—	—	押型文(楕円)底部	
SI-8	70× 70	10	—	d−3	やや密	〃	〃	—	—	—	—	
SI-9	100×100	20	有(円形)	d−4	密	人頭大 拳大	丸礫 角礫	有	—	—	—	
SI-10	70× 70	10	—	d−4	やや密	拳大	角礫	—	—	—	—	
SI-13	80× 70	20	有(円形)	d4〜d5	疎	〃	〃	—	—	—	—	
SI-14	70× 50	10	—	d4〜d5	やや密	〃	〃	—	—	—	貝殻条痕？	
SI-15	80× 60	10	—	d−5	疎	〃	〃	—	—	—	—	
SI-16	70× 60	10	—	d−5	やや疎	〃	〃	—	—	—	—	
SI-17	100×100	30	有(円形)	c−2	密	〃	〃	—	—	有	—	

3．遺　　物（第7図）

(1) 縄文土器（第7図1～8）

上ノ原遺跡出土の縄文土器の施文には、山形押型文系、楕円押型文系、貝殻条痕文系の3タイプのものがみられる。

1，**2**は山形押型文である。**1**は、口縁部外面に縦方向の山形文、内面上端部に原体条痕下位に横方向の山形文を施したもの。**2**は、外面の施文が横方向の山形文で内面は1と同じ施文である。

3は楕円押型文で口縁部外面に縦方向の楕円文を施している。内面には横方向の楕円文を施し、口唇部に原体を押圧している。

4は貝殻条痕文を施した口縁部で外面に横方向の条痕を施している。

5～**8**は底部である。**5**は横方向の楕円押型文を施した尖底である。**6**は無文の尖底、**7**は楕円押型文を施した平底である。**8**は無文でやや上げ底気味の平底である。

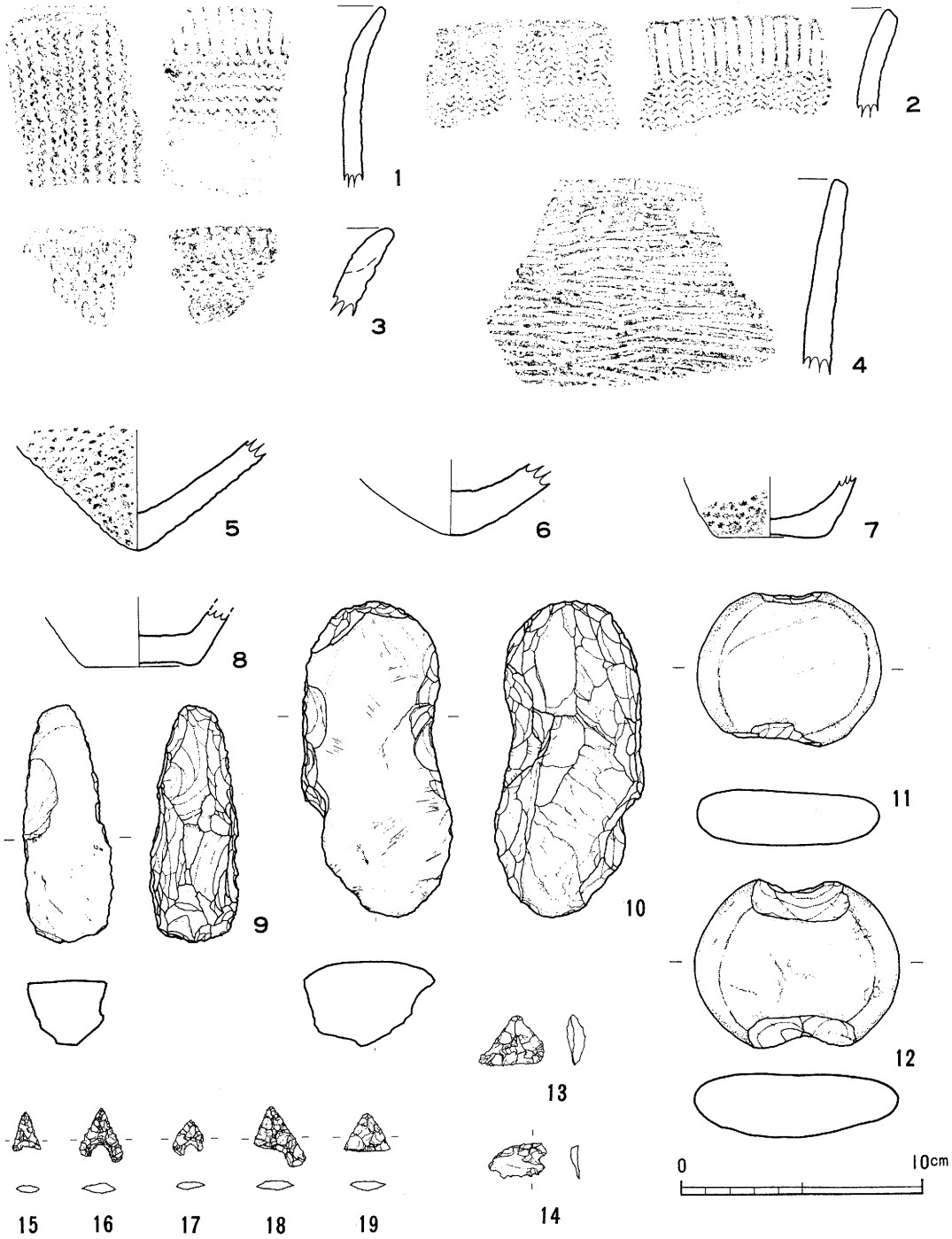
(2) 石　　器（第7図9～19）

9，**10**は石斧。**9**は長さ9,8cm、幅3.6cm、厚さ2.7cmを測る。**10**は長さ13.0cm、幅5.8cm、厚さ3.5cmを測る。5，6とも打製斧で片面は自然面として残している。

11．**12**は石錘。いずれも石の短軸に打欠をもつ。**11**は長さ7.6cm、幅6.4cm、厚さ2.3cm。**12**は長さ9.6cm、幅7.0cm、厚さ2.6cmを測る。

13は石匙である。長さ2.0cm、幅2.6cm、厚さ0.8cm。石材は黒曜石。**14**は石鋸と思われる。長さ2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm。石材は黒曜石。

15～**19**は石鏃である。**15**～**17**は二等辺三角形状を呈し、石材には黒曜石を用いる。**18**，**19**は正三角形状を呈し、チャートを石材に用いる。**19**以外は基部に抉りを持つが欠損がみられる。計測値は次の通りである(長さ×幅×厚さ)。**15**は1.7cm×1.2cm×0.3cmで抉りは短い。**16**は2.3cm×1.7cm×0.4cm、片脚部を一部欠く。**17**は1.5cm×1.3cm×0.3cm。片脚部は全部、もう片脚部も一部欠く。**18**は2.5cm×2.0cm×0.3cm。片脚部を完全に欠く。**19**は1.6cm×1.9cm×0.3cm。抉りなし。



第７図　縄文時代出土遺物実測図（縮尺1/3）

第Ⅲ章　弥生時代の遺構と遺物

1，1号住居跡（SA-1）（第8図）

ＳＡ-1はｄ3区～ｄ4区で検出された。平面プランは方形を呈し、長軸537cm、短軸527cm、確認面からの深さ約25cmを測る。住穴は４本柱で、径30～40cm、深さ70～80cm、柱間120～130cmを測る。柱穴にはそれぞれ抜き取り穴が認められる。南側の２本の柱穴間には長軸48cm×短軸42cm、深さ10cmの皿状楕円形の掘り込みがあり、埋土中および床面より炭化物が多量に検出された。また、住居跡内からは多くの炭化材を検出したが、特に北壁中央部には長さ40～50cmの炭化材４～５本が壁面と直角に到れかかる状態で検出された。

出土遺物には小形の甕、鉢、高坏の脚部、裾部片の土器類と、砥石、磨石、石包丁の石器類がある。なお、住居跡の主軸はほぼ南北方向にある。

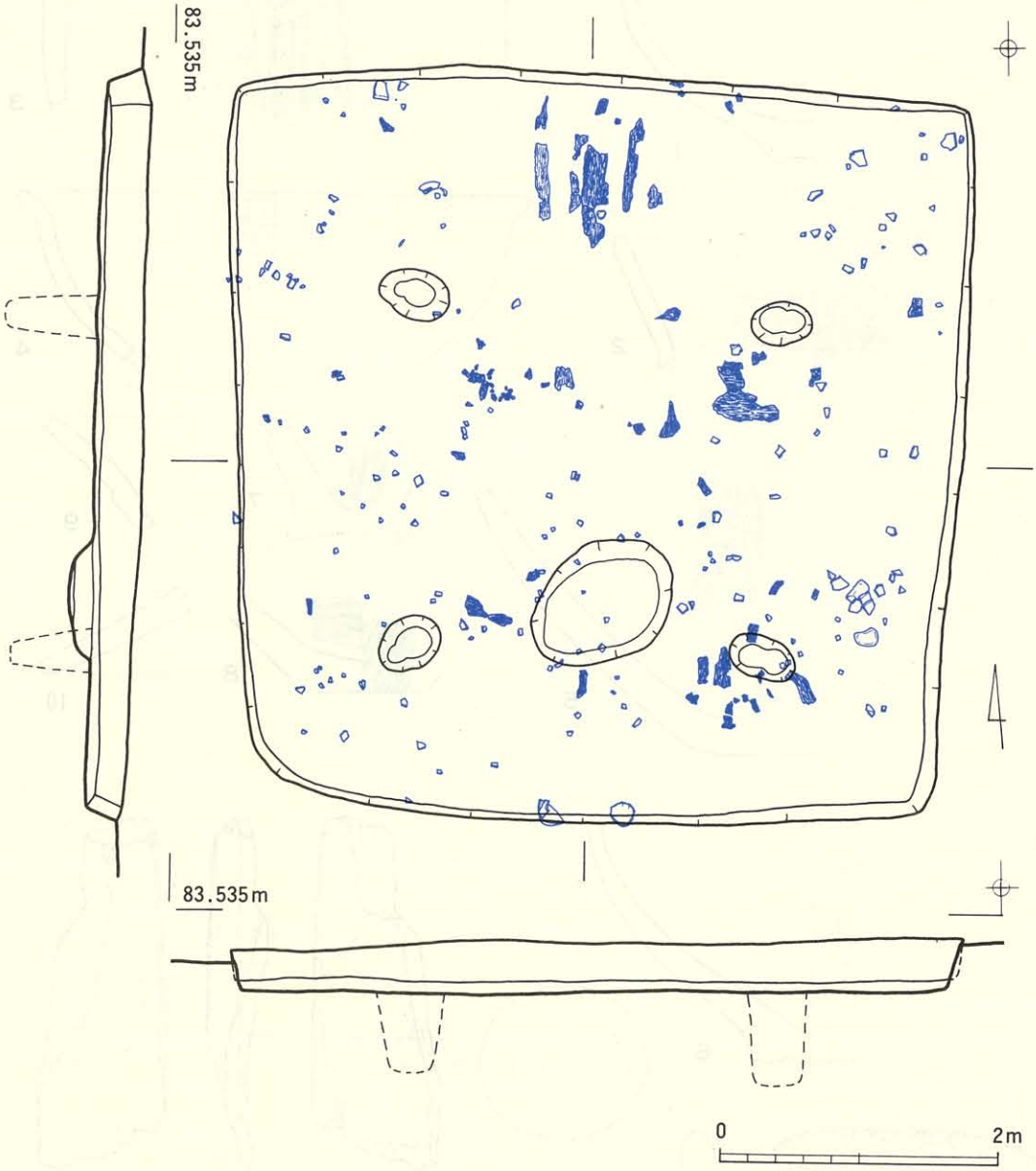
遺　物（第9図1～13）

土器　**1**は器高14.0cm、口径16.3cmと小型の甕である。口縁部は大きく外反し、胴部は球形に近い。底部は上げ底気味である。内面はナデ調整を施してある。**2**，**3**は口縁部が内彎気味に開く甕である。**4**は深さ８cm前後、口径19.0cmの鉢で内面はミガキ気味のナデ調整が施されている。口縁部はラッパ状に開く。**5**～**8**は底部で、平底（５，８）のものと、上げ底（６，７）のものがある。**9**は高坏脚部、**10**は高坏脚部の破片である。**9**は坏下半部が内彎し、口縁部が稜をもって外反するものである。**10**は外反する脚部である。**9**，**10**はヘラミガキによる調整がみられる。

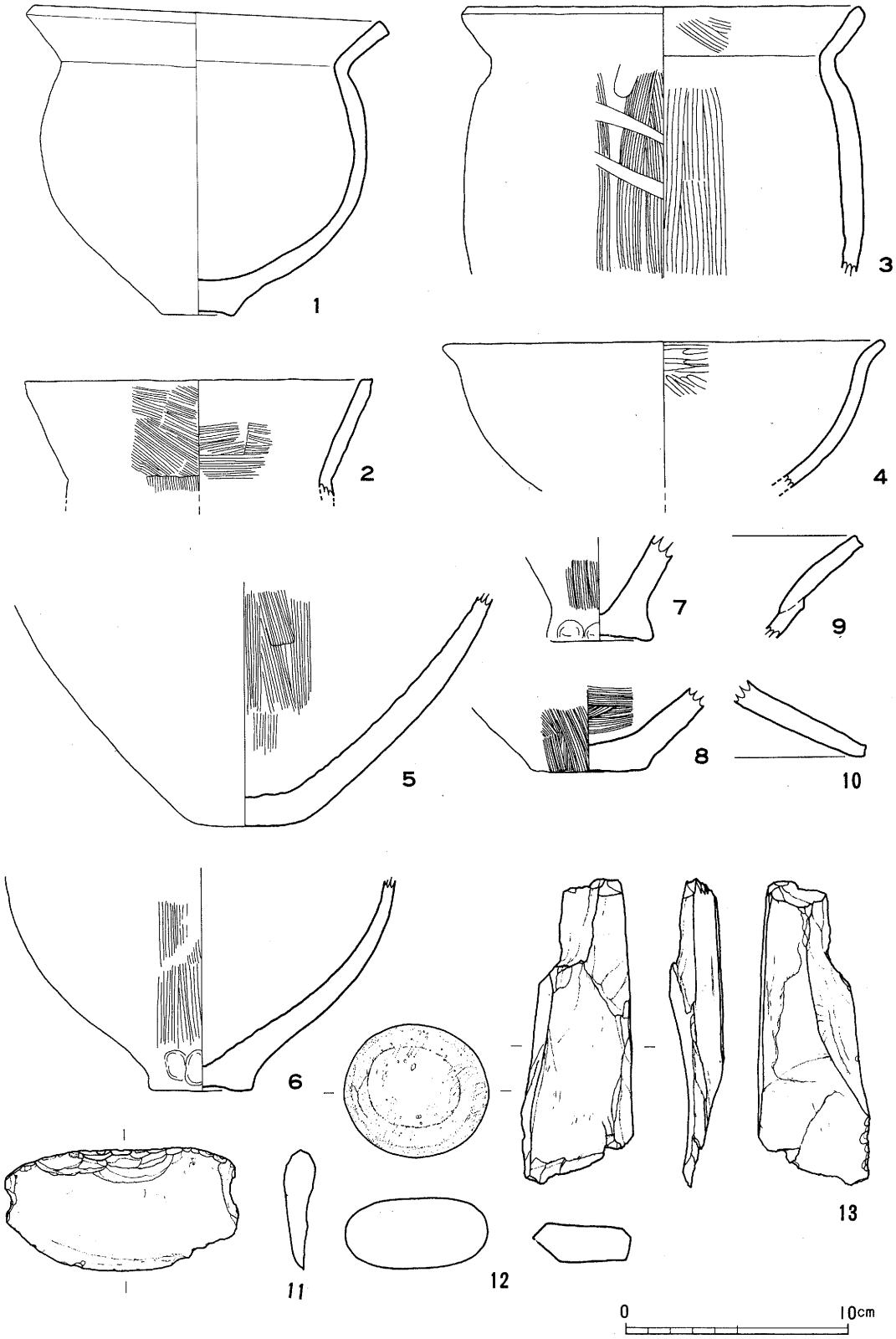
石器　**11**は石包丁で長さ10.4cm、幅5.4cm、厚さ1.4cmを測る。両側の短辺に抉りを入れた方形打製石包丁である。石材は硬砂岩。**12**は硬砂岩の磨石である。**13**は片面使用の砥石である。

2．2号住居跡（SA-2）・6号住居跡（SA-6）（第10図）

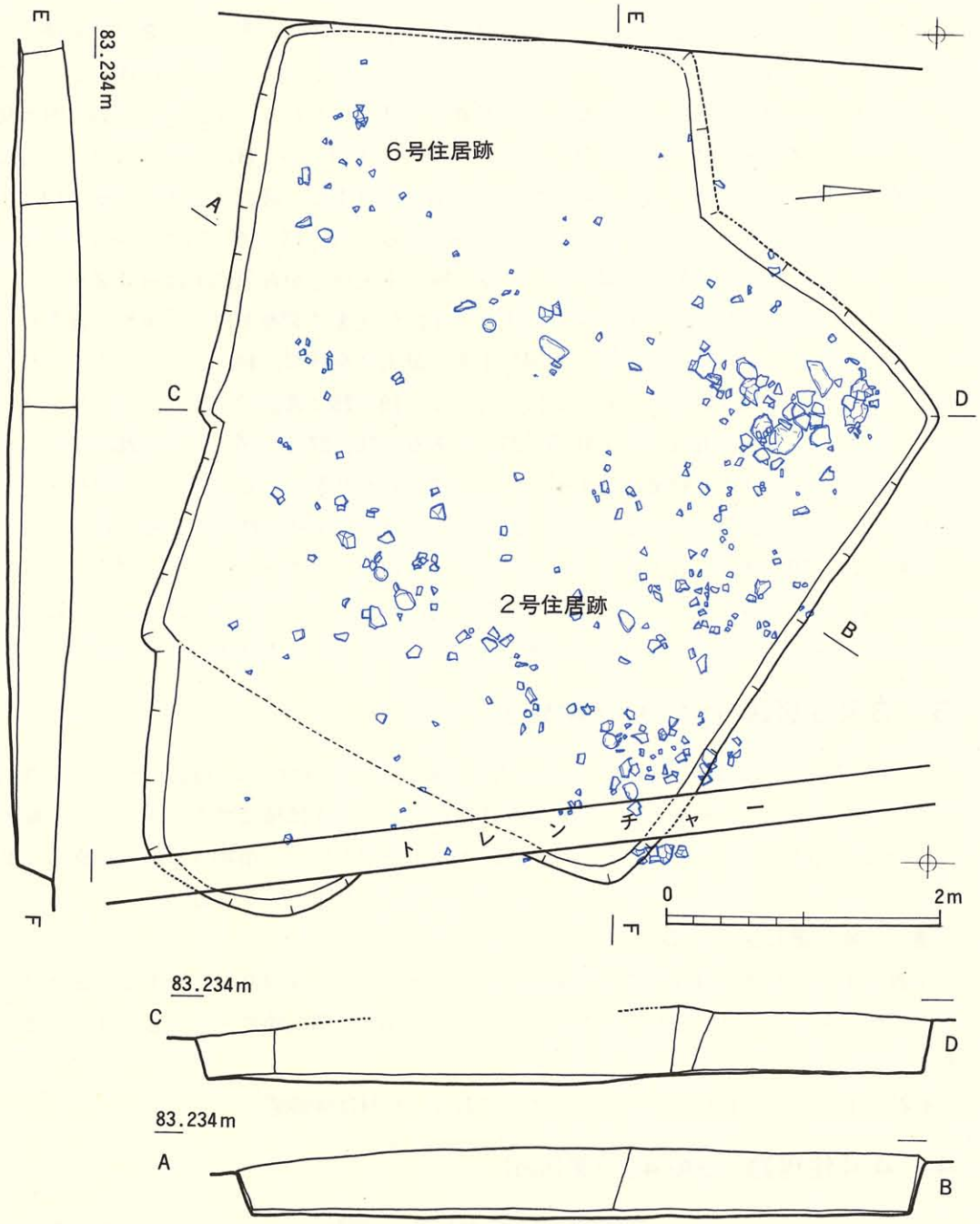
46号墳東側のＣ-２区に位置する。**SA-2**は長軸48.0cm、短軸434cm、確認面からの深さ約30cmの方形プランを呈する。主軸をＮ-50°-Ｅにもつ。柱穴は検出できなかった。また東側に張出し部と思われる落ち込みがあったが、掘り込みも浅く、壁面も明確には検出できなかった。埋土も砂質土であり攪乱の可能性が大きい。一方、**SA-6**は長軸340cm、短軸300cm、確認面からの深さ約30cmの方形プランを呈する。主軸はＮ-20°-Ｅにもち、西壁が46号墳丘内に入り込む。また、柱穴はＳＡ-2同様検出できなかった。ＳＡ-2とＳＡ-6の切り難い関係については埋土の状態からは明確に言えない。遺物の分布状況は大部分がＳＡ-2に集中しており特に北側に密集する。出土遺物には、二重口縁壺、壺、甕、小鉢、高坏片等の土器類の他、石器としては磨石も出土する。



第８図　１号住居跡実測図および遺物出土状態図（縮尺1/60）



第９図　１号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



第10図　２号住居跡・６号住居跡実測図および遺物出土状態図（縮尺1/60）

遺　　物（第11図１～10，第12図11～16，第13図17～22，第14図23～30）

土器　**1**は二重口縁壺で内傾気味に立ち上がりをみせる口縁部である。**3**は二重口縁壺で頸部にはヘラ状施文の刻目突帯を持つ。口縁部はラッパ状にひろがる。**2**は最大径を胴部中程に持ち、口縁部は外反気味にひろがる。肩部の張りがない壺である。**4**も２と同タイプの壺であるが、頸部は狭い。**5**の平底が**4**の底部と思われる。４，５の色調は明赤褐色を帯びる。**7**～**9**は鉢である。**7**は器高12.3cm、口径13.8cm、**8**は器高10.1cm、口径10.3cm。**9**は器高6.5cm、口径8.1cm。いずれも口縁部は直口する。底部は平底である。**10**は胴部から直立する甕の口縁部である。**11**～**18**は甕である。11，13，15，16は口縁部が外反し、胴部上半部がやや張る。口径に最大径がくる。胴部中央付近から急にすぼみ底部がつく。底部は平底である。11，16は外面の胴部中央～下部付近までタキキによる調整が施されている。12は口縁部が外へ大きく開き、胴部中央に最大径を持つ。14，17は頸部のくびれがゆるやかである。**18**は口縁部がわずかに内彎する。**19**～**25**は底部で、平底（20，21，24）、上げ底（19，22，23）、丸底気味の底部（25）がある。**26**，**27**は高坏である。**26**は坏部から脚部へかけての部分で、脚部は若干裾部へ向ってひろがりをみせる。屈曲部に穿孔を持つ。坏部との接合は円盤充填法と思われる。**27**は裾部片で外反気味に開き、穿孔を持つ。

石器　**28**～**30**は硬砂岩質の磨石である。径11cm～12cm、厚さ５cm～６cmを測る。

なお、上記の土器、石器のほとんどがＳＡ-２内に分布する。ただし、22の底部の破片が一部ＳＡ-６内に分布する。また、18の甕の破片の一部がＳＡ-１より出土している。

３．３号住居跡（SA-３）（第15図）

ＳＡ-１の南約6.6ｍのｅ-３区で検出された。長軸330cm、短軸310cm、確認面からの深さ約20cmの方形プランであるが、若干台形気味にひろがる。柱穴は確認できなかった。主軸はほぼ南北方向にある。南側に100cm×130cmの張り出し部を持つ。遺物は土器片（甕）や磨石等など20～30点と少なく、そのほとんどが埋土上層より出土している。

遺　　物（第15図１～５）

土器　**1**は大型甕の口縁部でほぼ横に向って外反する。口縁端部が比厚する。**2**は口径を最大径とする甕で口縁部が水平方向にのびる。口辺部が凹気味である。**3**，**4**は平底の底部である。

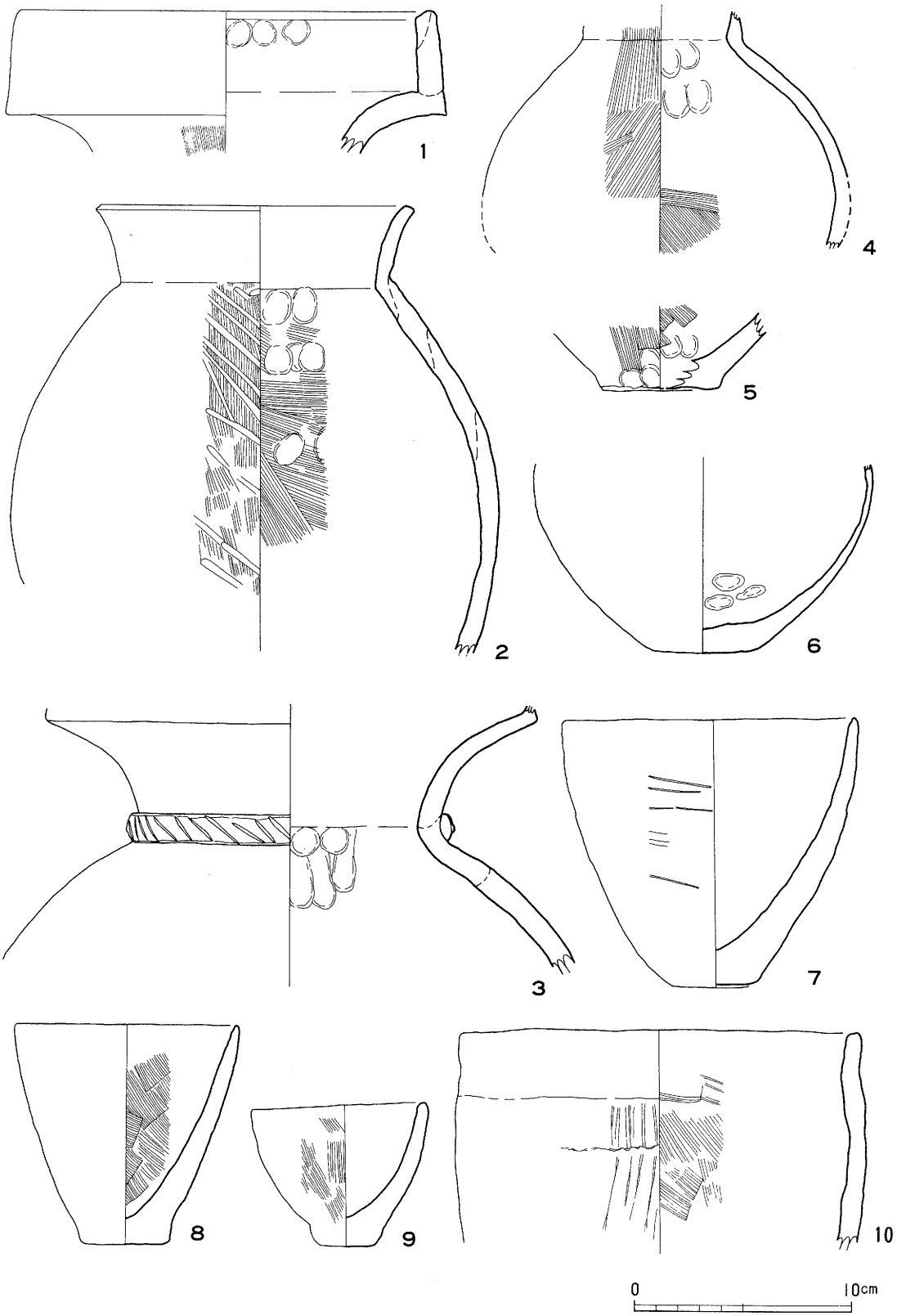
石器　**5**は、径8.9cm、厚さ4.3cmの磨石である。石材は硬砂岩。

４．４号住居跡（SA-４）（第16図）

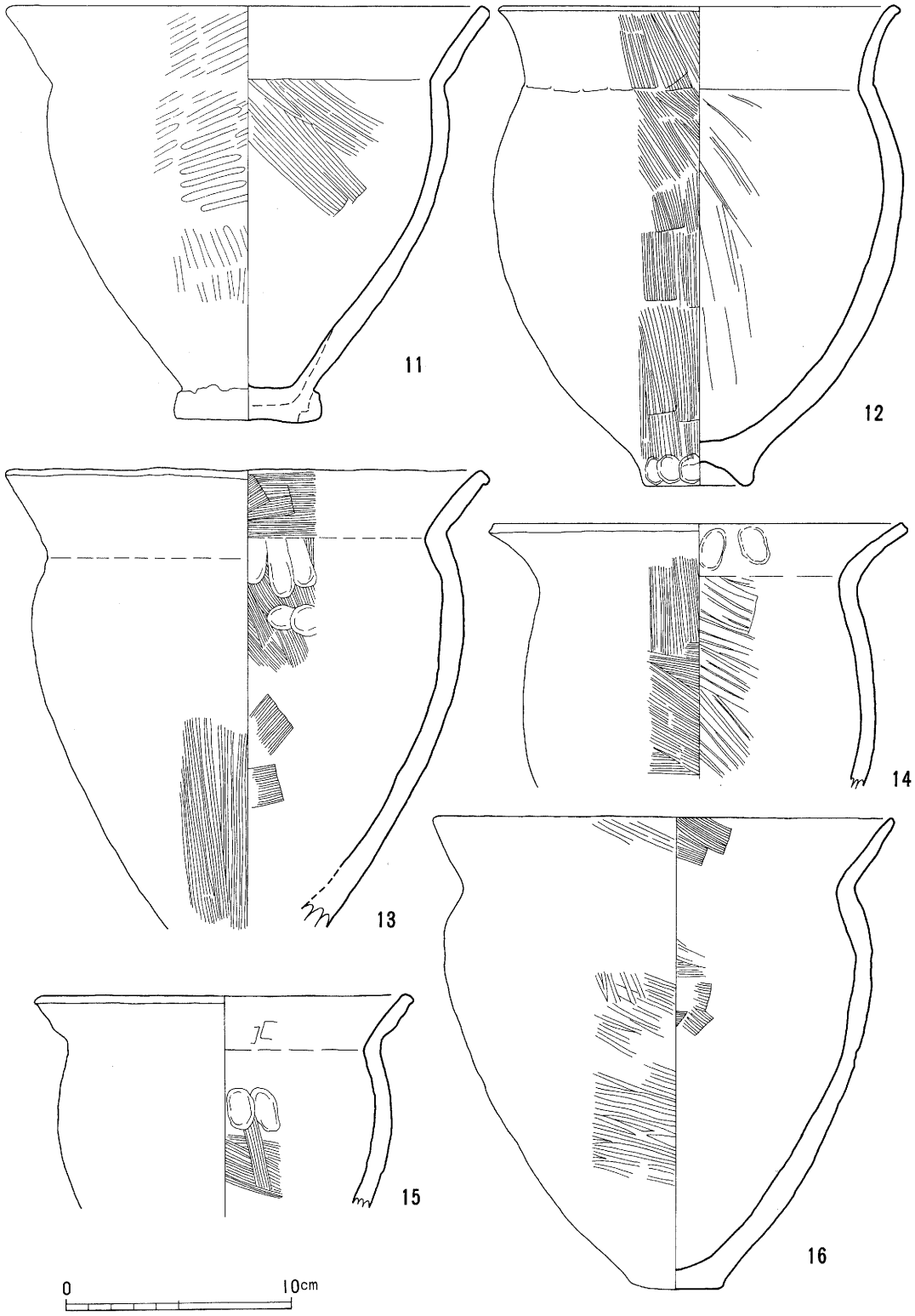
ＳＡ-２の北約５ｍのｂ-２区に位置する。長軸354cm、短軸297cm、確認面からの深さ20cmの長方形プランである。主軸はほぼ南北方向にある。柱穴は確認できなかった。遺物は鉢、器台、壺などの土器類の破片で出土量は少なく、埋土上層より出土している。

遺　　物（第16図１～４）

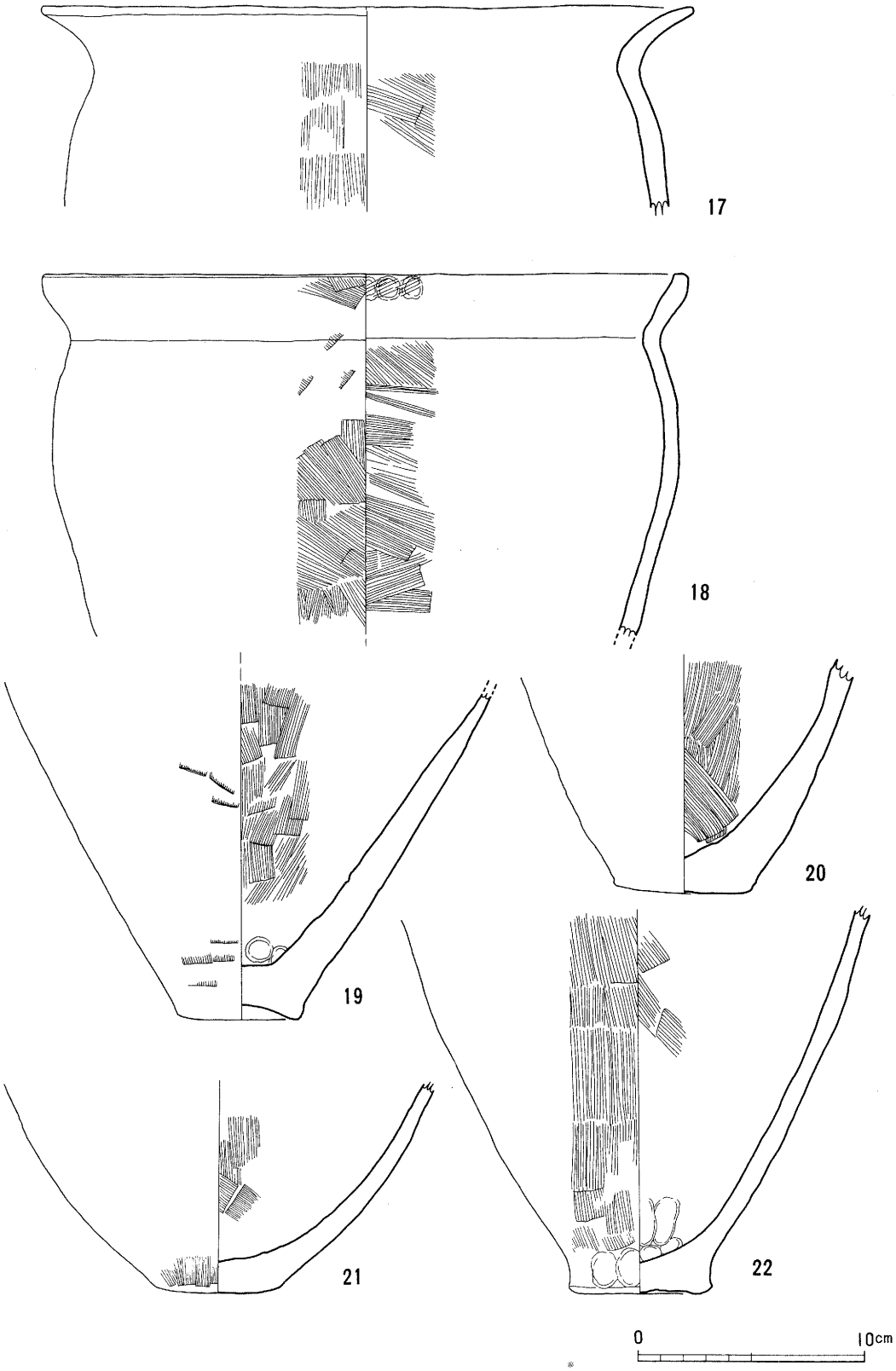
土器　**1**，**2**は鉢である。**1**は底部を欠くが、直口気味の半球形の鉢である。器面をた



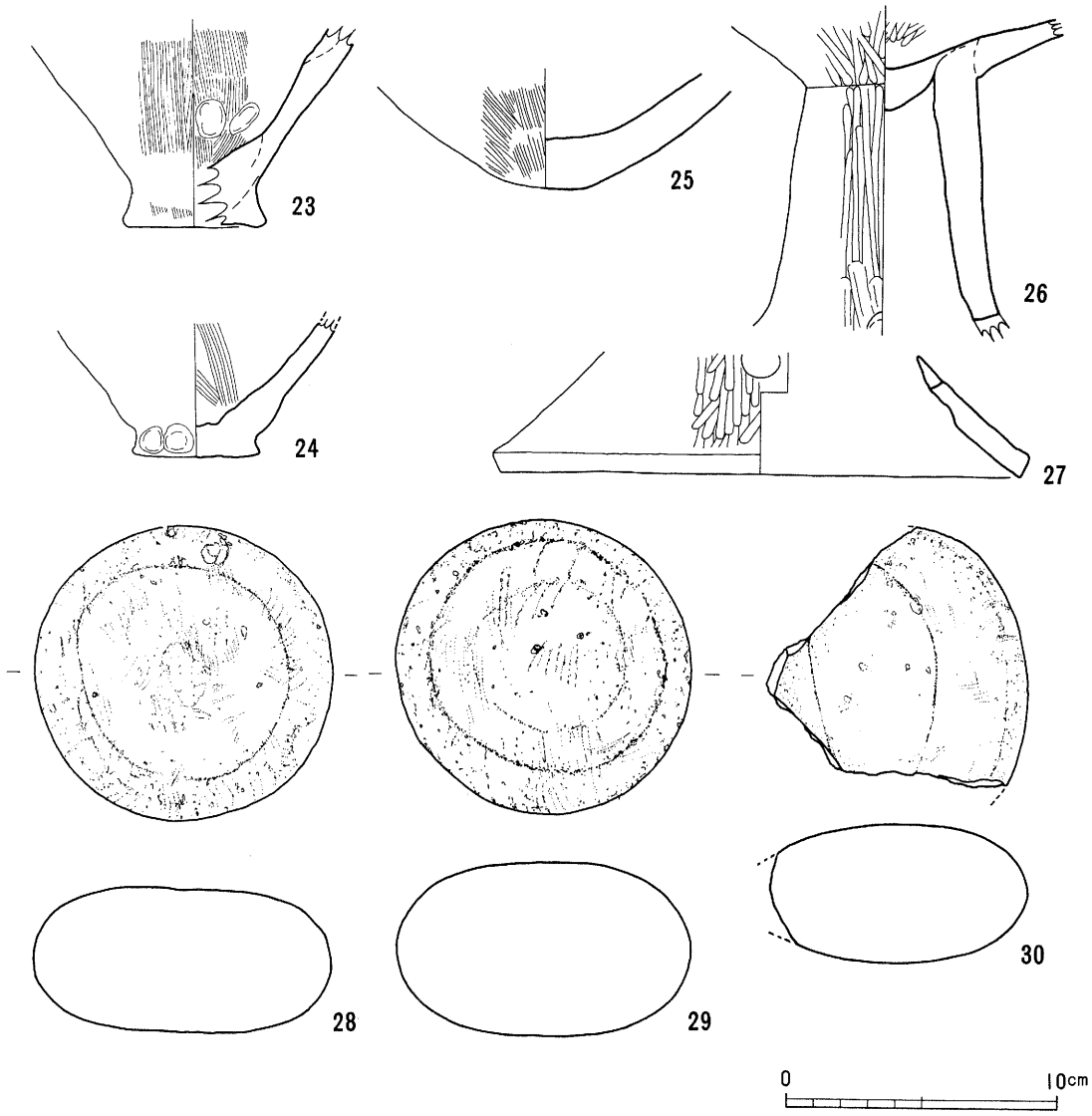
第11図　２号住居跡出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）



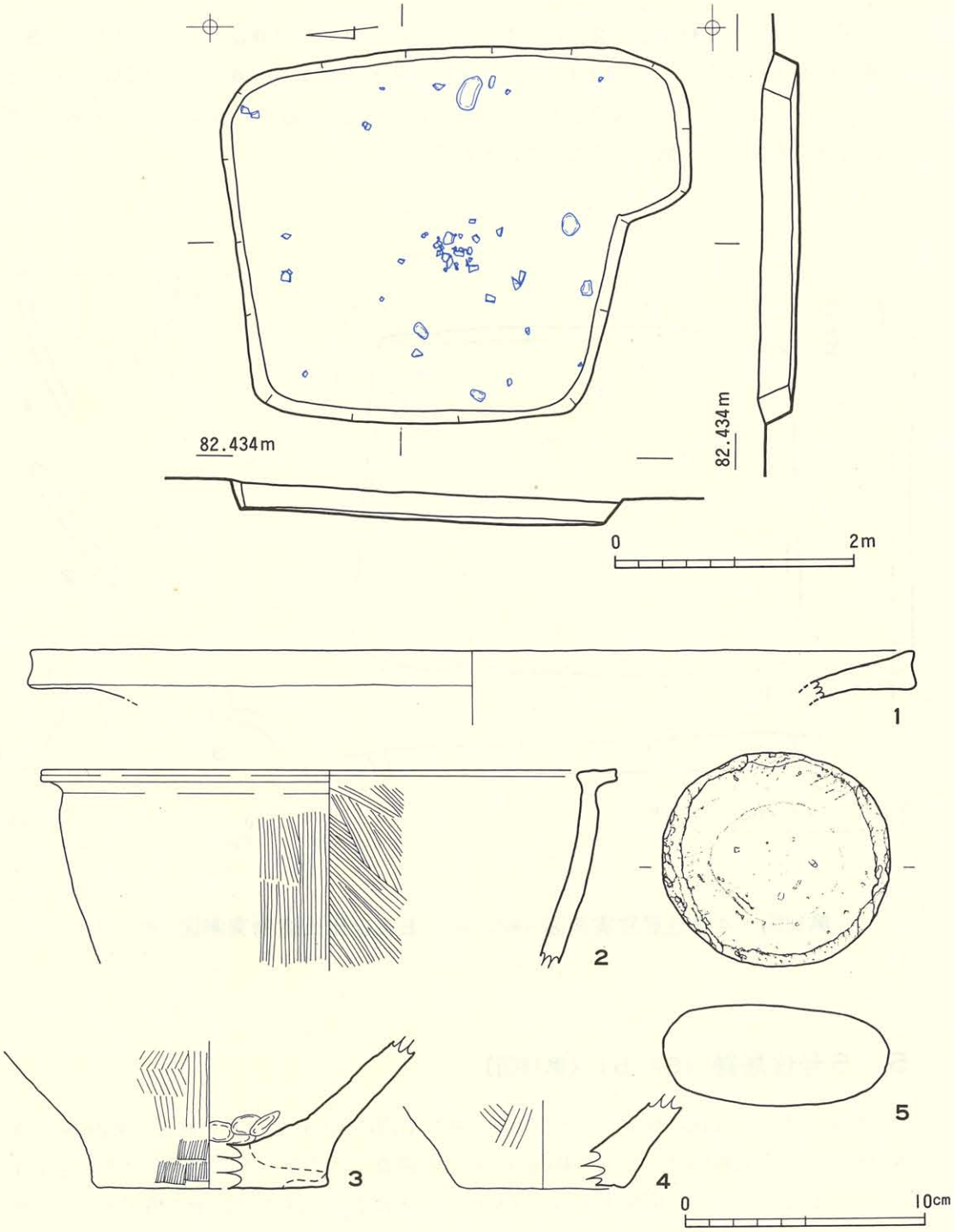
第12図　２号住居跡出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）



第13図　２号住居跡出土遺物(3)（縮尺1/3）

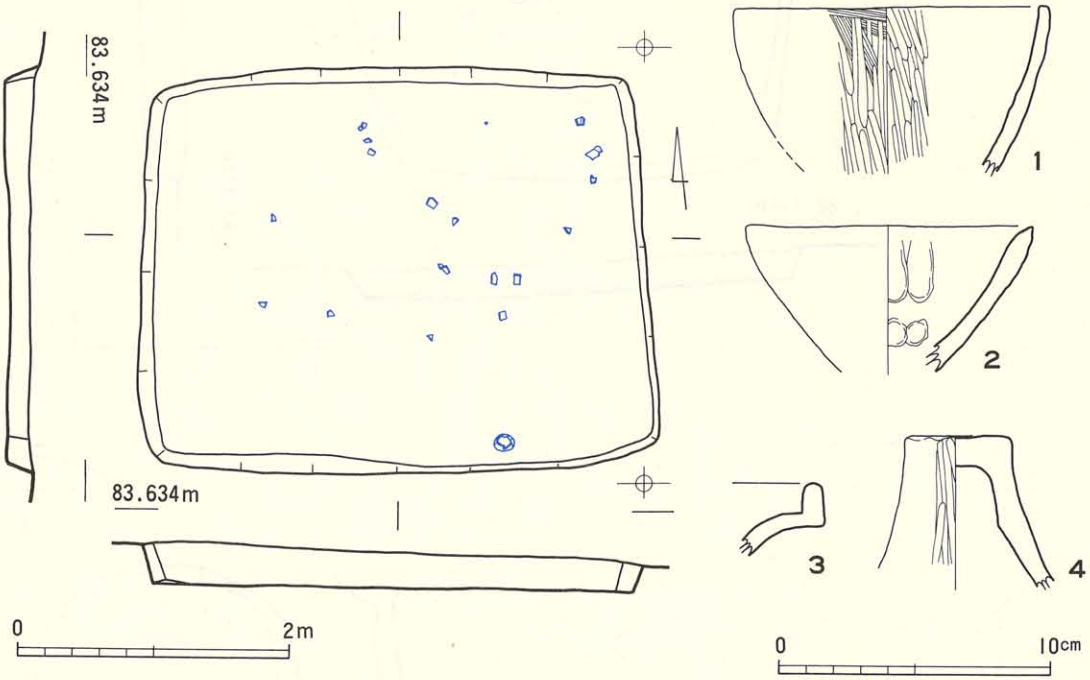


第14図　２号住居跡出土遺物実測図(4)（縮尺1/3）



第15図　３号住居跡実測図（縮尺1/60）**および出土遺物実測図**（縮尺1/3）

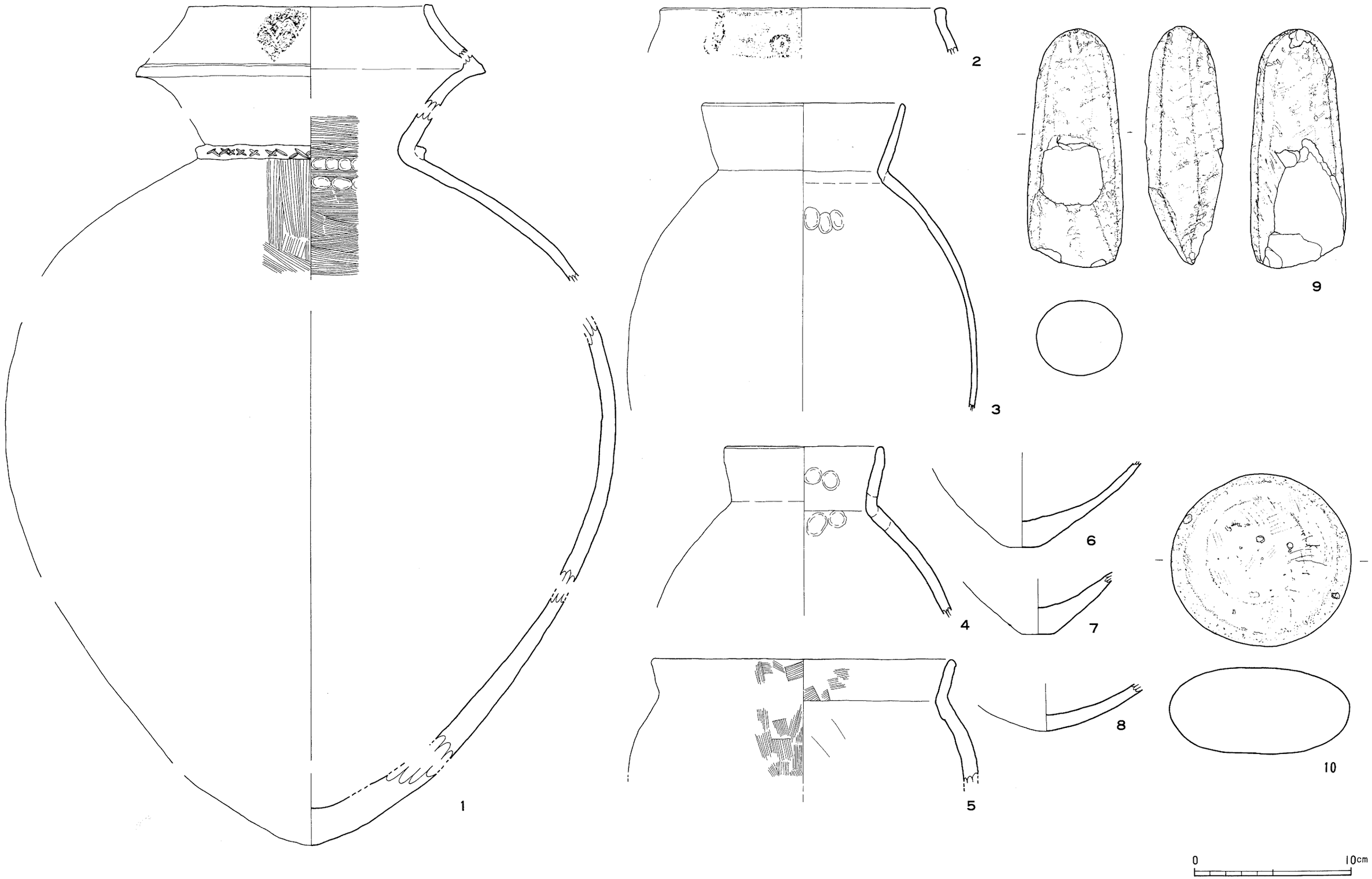
て方向のミガキで調整する。**2**は口縁部が大きく開く鉢で、口辱部が若干比厚する。**3**は二重口縁壺の口縁片である。口縁部の立ち上りはやや内傾する。**4**は器台と思われる。上部および内面はナデによる調整、外面はミガキが施されている。上部は径3.8cmを測り、裾部は欠損するがラッパ状に開くものと思われる。



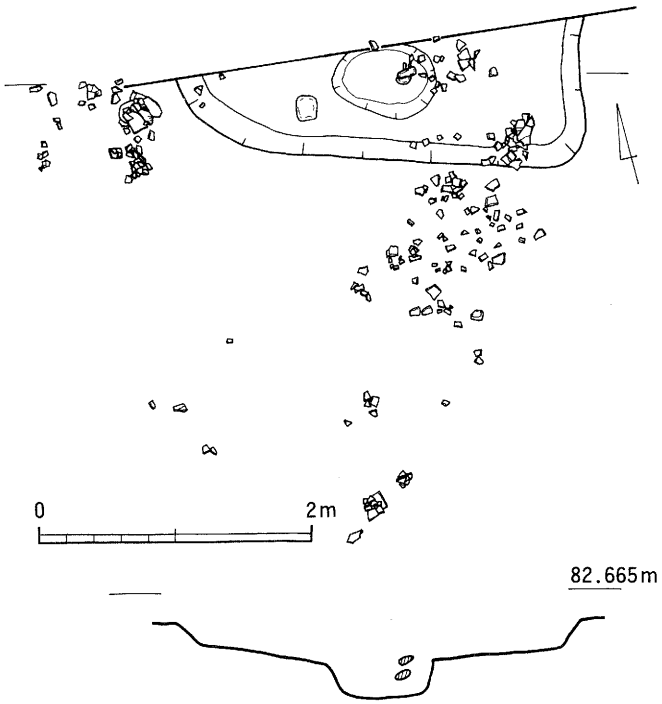
第16図　4号住居跡実測図（縮尺1/60）　**および出土遺物実測図**（縮尺1/3）

5．5号住居跡（SA-5）（第18図）

46号墳の南、e-1区に位置し、その大半が46号墳内に入り込むと思われる。東西幅が236cmであるが、南北幅50cm～80cmの範囲のみのしか調査できなかった。プランは方形を呈すると思われる。住居跡の南端中央に、径約60cm、床面からの深さ約20cmの楕円形土坑が検出され、埋土中より磨製石斧と磨石を出土したが、炭化物、焼土等は検出できなかった。遺物は石器類をはじめ、壺、甕等の土器類が出土した。大部分の遺物は、住居跡周辺、および住居跡埋土上層からの出土である。



第17図　５号住居跡出土および周辺出土遺物実測図（縮尺1/3）

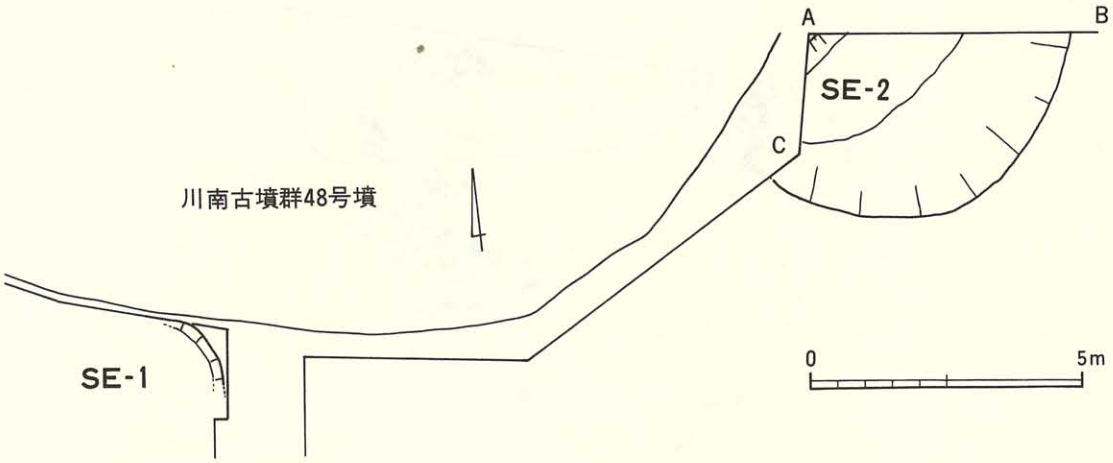


第18図　５号住居跡遺物出土状態図（縮尺1/60）

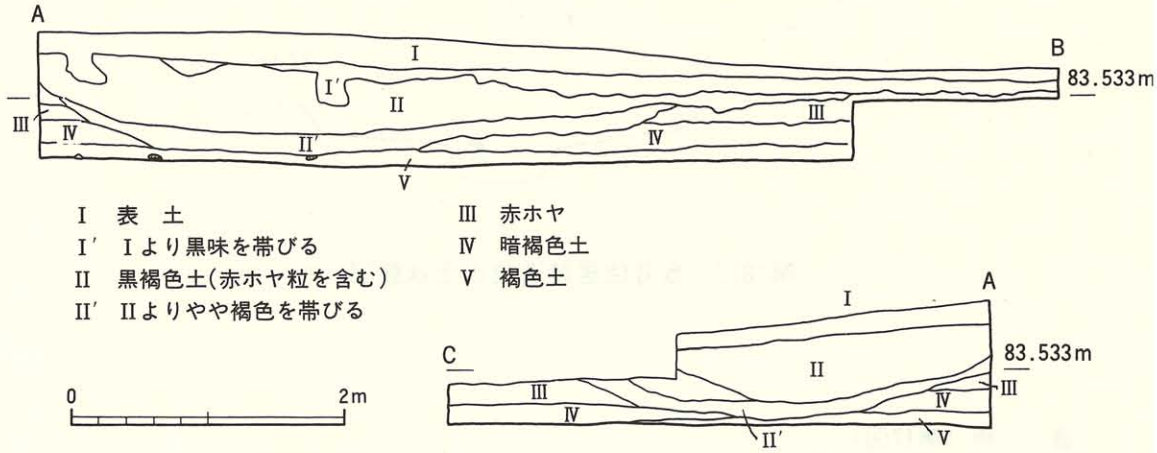
遺　　物（第17図）

土器　**1**は二重口縁壺である。頸部に１条の突帯を巡らせ、X状の刻目を施している。口縁部は内傾すると思われる。口縁部には櫛描波状文がみられる。器形は胴部中央を最大径とする倒卵形で底部は尖り気味の丸底と思われる。**2**は内傾しながら口唇部が比厚し直口する二重口縁部である。口縁部には長さ2.8cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmの棒状の浮文と径1.4cm、厚さ0.2cmの円形浮文を施してある。円形浮文は中心部を竹管で押圧している。**3**，**4**は壺である。口縁部は内彎しながらひろがる。肩部の張りがなく倒卵形の胴部をもつ。胴部中央に最大径をもつ。**6**は３の底部と思われる。**5**は甕で、口縁の外反度は低い。胴部上位に最大径をもつ。**6**～**8**は底部である。いずれも丸底化の強い平底である。

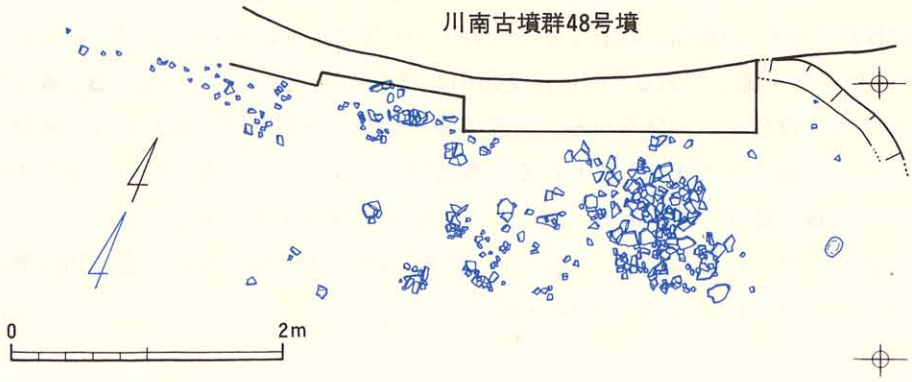
石器　**9**は磨石石斧。長さ15.4cm、幅6.0cm、厚さ5.8cm。着装痕がみられる。**10**は磨石。径11cm、厚さ5.6cm。石材は９，10とも硬質砂岩。



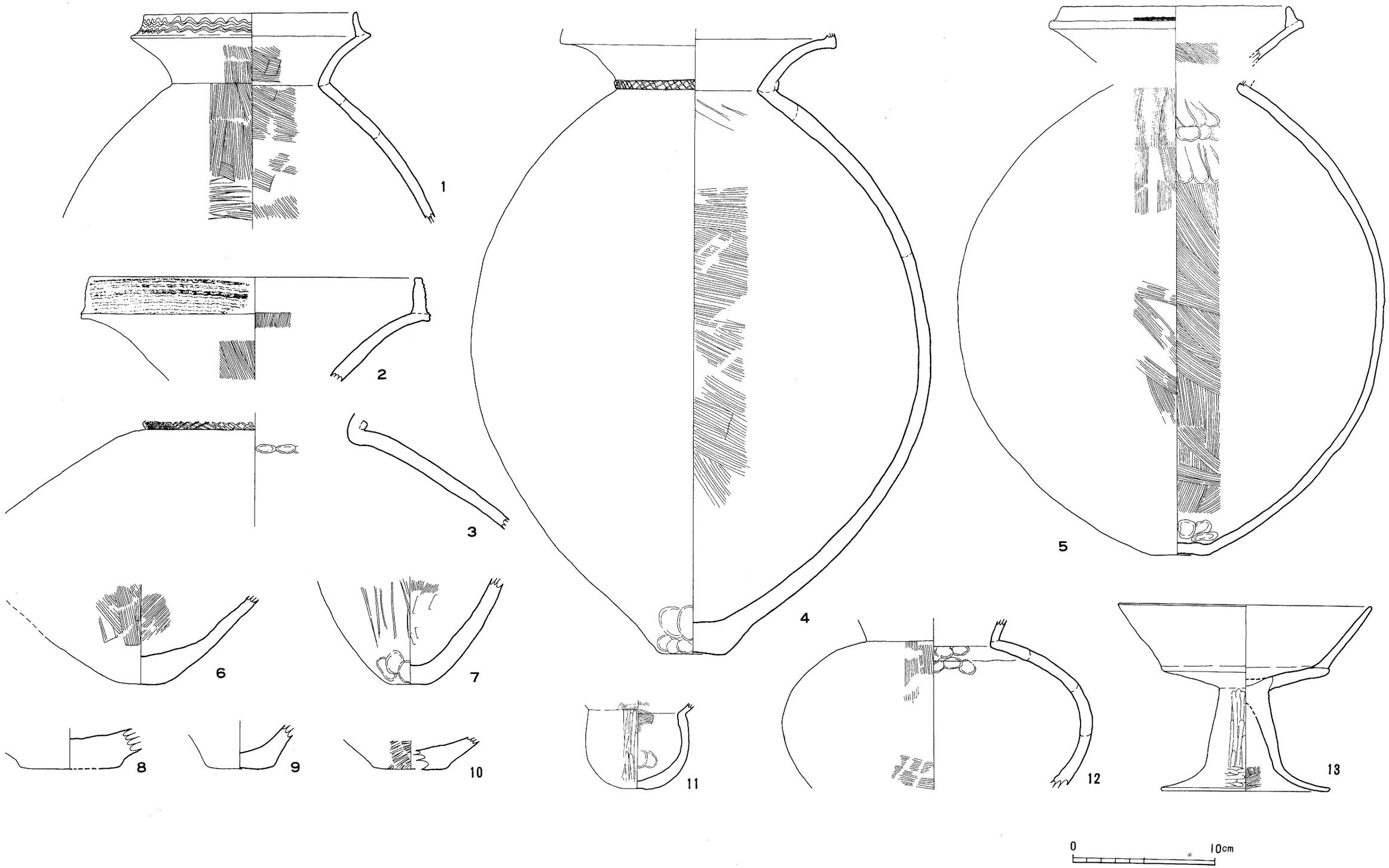
第19図　溝状遺構(SE-1,SE-2)実測図（縮尺1/150）



第20図　SE-2 土層断面図（縮尺1/60）



第21図　SE-1 遺物出土状態図（縮尺1/60）



第22図　溝状遺構出土土器実測図SE-1(1～10),SE-2(11～13)（縮尺1/3）

6．溝　状　遺　構

48号墳の南側（ＳＥ-1）と東側（ＳＥ-2）にそれぞれ溝状の遺構を１基ずつ検出した。ＳＥ-1からは二重口縁壺が多く出土した。また、ＳＥ-2からは高坏、壺が出土した。

SE-1（第19図・21図）

遺構確認の際には48号墳に入り込む形で黒色土の落ち込みがみられ、古墳に沿うように遺物が出土した。しかし、明確な壁面は検出できず、ようやく東側で48号墳に入り込むように壁面の立ち上がりが検出できた。遺物は埋土上位に集中している。

遺　　物（第22図１～10）

1～**5**は櫛描波状文系の二重口縁壺である。１，５は頸部に突帯のないタイプで口縁部に櫛描波状文を施す。口縁部の立ち上りは若干内傾する。胴部は中央部に最大径を持つ球形を呈し、底部は平底である。**2**，**4**は頸部にＸ状の刻目突帯を持ち、口縁部はほぼ直立し、櫛描波状文を施す。胴部は球形あるいは長胴形を呈し、底部は若干尖り気味の平底である。**1**は口径15.1cm、**2**は口径23.4cm、**4**は胴部最大径32.4cm、器高44.0cm、**5**は胴部最大径30.0cm、口径16.0cmを測る。2，3，６は同一個体と思われる。**6**～**10**は底部で平底が主流である。

SE-2（第19図・第20図）

48号墳の東側にＳＥ-1同様古墳に入り込む形で検出された。プランとしては余り明確には検出できなかったが、東方向、および南北方向の土層断面から溝状の落ち込みを確認した。土層断面をみるとＩ～II層は表土および耕作土であり、アカホヤ層（III層）まで削平されている。そのため、溝はIII層から確認でき、IV層に及ぶ約30cmの深さに掘り込んである。溝の幅は約４ｍを測る。また、溝の傾斜はゆるやかである。溝のプランは調査範囲が狭く、また、南側のプランが明確に検出されなかったためはっきりしない。遺物は、南側角を中心に高坏、壺が出土する。

遺　　物（第22図11～13）

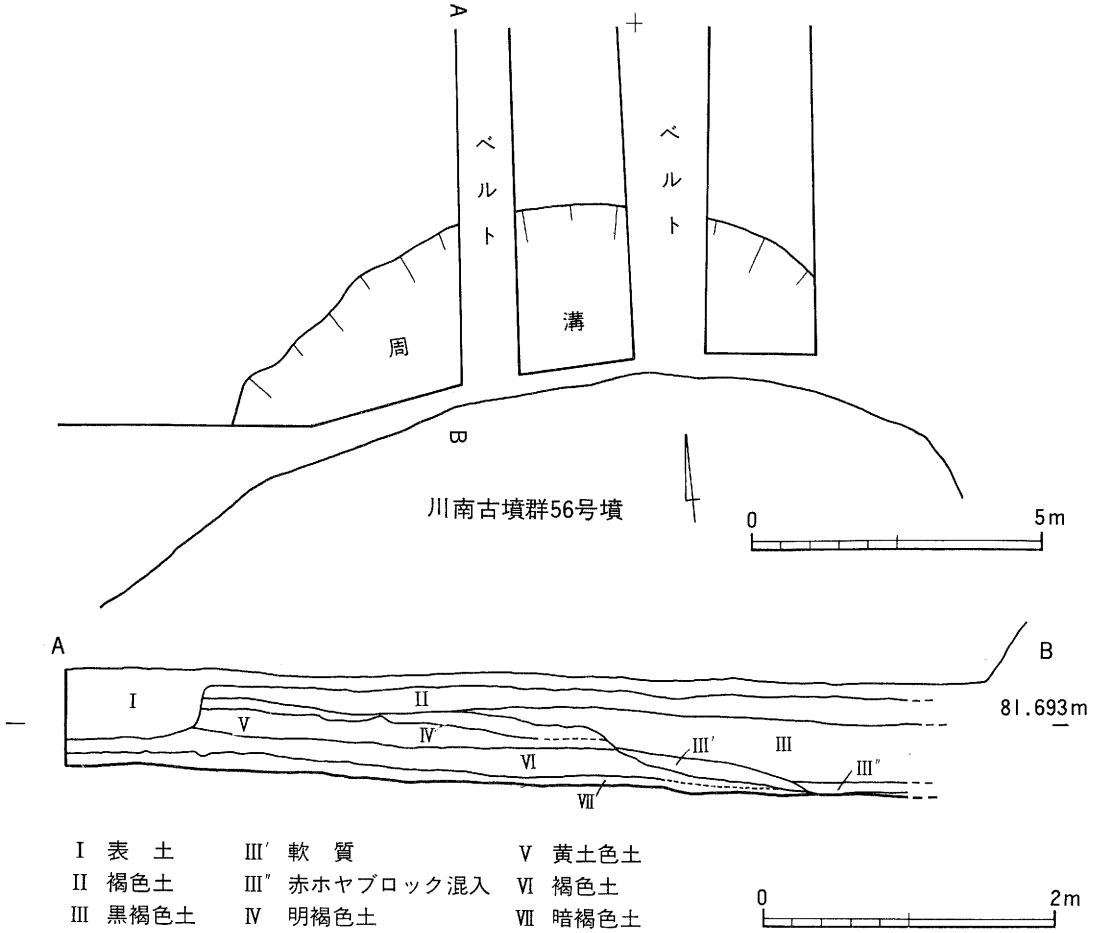
11は小型の壺と思われる。外面はヘラ削りが施してある。器高6.2cm。**12**は胴部のかなり張る壺で、口縁部は欠損するが外反すると思われる。胴部最大径は21.9cm。**13**は高坏で、坏部は下位で稜をもち、口縁部は大きく外傾する。脚部はゆるやかに外反し、裾部から大きくひらく。脚裾部にヘラ磨きがみられる。器高13.0cm、口径17.8cmを測る。

第Ⅳ章　古墳時代の遺構

調査区の周辺には川南古墳群46号、48号、56号墳の３つの古墳が分布する。調査では、これら古墳に対し垂直にトレンチを入れて周溝の確認を行なった。その結果、北に隣接する48号墳では周溝を確認できず、南側および東側で溝状遺構２基を検出した。また、西に隣接する46号墳について北側、東側、南側にそれぞれトレンチを入れて調査したが、東側と南側からは竪穴住居を検出したが、北側も含め周溝の確認はできなかった。一方、南に隣接する56号墳からは北側で周溝と思われる落ち込みを検出した。

56号墳周溝（第23図）

墳丘裾からの幅約４ｍ、深さ約0.6mを測る。溝の傾斜はゆるやかで明確な掘り込みは検出できなかった。墳丘裾には耕作による排土が盛土がれていることもあるが墳丘側の立ち上がりは墳丘内まで入り込む可能性を持つ。遺物は出土していない。



第23図　56号墳周溝実測図（縮尺1/150）**および土層断面図**（縮尺1/60）

第Ⅴ章　結　　語

上ノ原遺跡の発掘調査では、縄文時代早期と弥生時代後期～終末期にかけての遺物、遺構が検出された。

縄文時代早期では、遺物は楕円、および山形押型文、貝殻条痕文に限られる。特に底部については、楕円押型文の尖底、平底、無文の尖底、平底が出土しており、楕円押型文の尖底部は県内では出土例も３例を数えるのみである[(1)]。次に検出された集石遺構と配石遺構について述べると、集石遺構については従来から「石蒸し」的な機能が考えられている。県内においても近年その調査例が急増し、資料の貯積は豊富になりつつある[(2)]。本遺跡においては、掘り込みを持つ集石（Ⅰ類）、持たない集石（Ⅱ類）、および配石（Ⅲ類）―配石遺構も焼礫による構成や、また、人為的な石の配置など現段階では集石遺構と類似の機能を持つと考えたい―の３タイプが存在する。Ⅰ類は掘り込み内に焼礫が密集し、炭化物も多量に検出されており、掘り込み内での火の使用が考えられる。Ⅰ類の分布は隣接はせず、７ｍ～10ｍの距離がある。Ⅱ類は焼礫も密集はしておらず炭化物も検出されない。分布はⅠ類、およびⅢ類の周辺か、あるいはⅡ類同志が隣接する形をとる。Ⅲ類は、人頭大の川原石が残るだけで、焼礫の密集や炭化物の検出はない。分布は、Ⅲ類同志、あるいはⅠ類とは５ｍ～10ｍの距離を保つ。以上のように本遺跡における集石遺構および配石遺構の分布は、Ⅰ類（７基）とⅢ類（２基）が５ｍ～10ｍの間隔で分布し、その周辺にⅡ類が隣接して分布する。このことは、集石遺構の持つ機能をⅠ類、Ⅲ類が果し、Ⅱ類は廃棄した礫群として単純にとらえることもできる。

弥生時代後期～終末期にかけての時期では、竪穴式住居跡６軒と溝状遺構が検出された。それらの出土土器について若干述べてみたい。１号住居跡（ＳＡ-１）出土（第９図）の土器と２号住居跡（ＳＡ-２）出土（第11～14図）の土器は甕や高坏に類似性をもつ。（ＳＡ-１-１とＳＡ-２-15の甕、甕の上げ底気味の底部（ＳＡ-１-７・ＳＡ-２-23，24）、ＳＡ-１-９，10とＳＡ-２-26，27の高坏）。また、ＳＡ-２の甕の一部にＳＡ-１出土の破片が接合できる点などからＳＡ-１とＳＡ-２はほぼ同時期と考えられる。そこで、出土遺物の多いＳＡ-２の土器の特徴をみると刻目の突帯の二重口縁壺（３）や、外反口縁壺（２）、さらにタタキ目の甕（11，16）、高坏（26，27）などがある。５号住居跡（ＳＡ-５）の土器群（第18図）としては刻目突帯の二重口縁壺（１）、や内彎口縁壺（３，４）等を出土している。また、溝状遺構（ＳＥ-１，２）出土の土器群（第22図）では、ＳＥ-１の刻目突帯の二重口縁壺（１～５）、ＳＥ-２の庄内系の高坏（13）などを出土している。３号住居跡については土器量も少なく、今回の考察からは省くことにする。以上、ＳＡ-１，２，５およびＳＥ-１，２出土の土器を比較すると、まず、二重口縁壺についてみると、口縁部に内傾から直立気味へと変化がみられる。（ＳＡ-５-１→ＳＥ-１-１→ＳＥ-１-２，５）、また、刻目突帯にも同一方向の刻目→Ｘ状の刻目→刻目突帯の消滅（ＳＡ-２-３→ＳＡ-５-１，ＳＥ-１-３，４→ＳＥ-１-１，５）との変化がみられる。また、ＳＡ-２-３の二

重口縁壺は口縁下部が他に比べ高く、外反度も大きい。一方、その他の壺について出土例が少ないが、ＳＡ-2-2とＳＡ-5-3，４の壺は同系譜のものと思われるが、口縁部に、外反（ＳＡ-2-2)→内彎気味（ＳＡ-5-3，４）の変化がみられる。このように、比較できる土器の器種、個体数は極めて少ないが、以上のことからＳＡ-2の土器群→ＳＡ-5の土器群→ＳＥ-1・ＳＥ-2の土器群[3]へと変化がみられる。時期的には弥生後期末～終末期にかけて対応できる[4]。近年、この時期の資料が増加しており、宮崎学園都市熊野原遺跡出土の土器群は、後期後半～終末期（Ａ・Ｂ地区[5]）と布留式併行期（Ｃ地区[6]）にかけての時期に比定されるが、両者を埋める時期(庄内系)は空白期となっていた。しかし、昭和59年度、新富町教育委員会が調査した川床遺跡では周溝墓群から後期後半～布留併行期の４期にわたる土器が出土している[7]。

上ノ原遺跡出土の土器群は川床遺跡とほぼ併行期に思われる。そのうち、川床Ⅲ（庄内期併行）と上ノ原遺跡溝状遺構（ＳＥ-1，ＳＥ-2）の土器群は同時期と思われ、熊野原遺跡での空白期を埋める資料と言える。しかし、ＳＥ-1，ＳＥ-２の土器については細分化も十分考えられる。

《註》

(1) 昭和60年度に調査が行なわれた妻道南遺跡(高鍋町)、新村、高山遺跡(野尻町)で出土している。

(2) 岩永哲夫・菅付和樹「宮崎県内の集石遺構(1)」『九州考古学第58号』

(3) ＳＥ-1とＳＥ-2は部分的な調査であったため、詳細については不明であり、土器についても細分化も考えられる。

(4) 石川悦雄氏の編年ではⅦ期～Ⅷ期に対比できる『石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案―素描」『宮崎県総合博物館研究紀要No.８』 1983年

(5) 宮崎県教育委員会「熊野原遺跡（Ｂ地区）」『宮崎学園都市埋増文化発彼講査概報（Ⅲ）』 1982年

(6) 宮崎県教育委員会「熊野原遺跡（Ｃ地区）」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集』 1985年

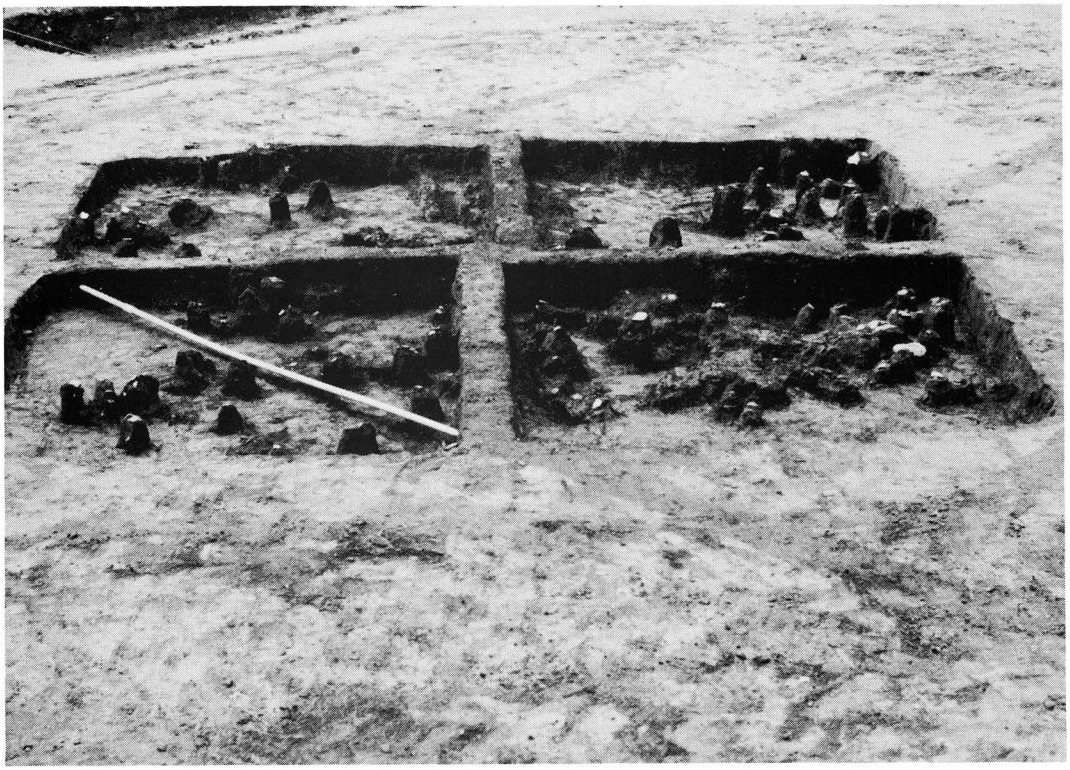
(7) 昭和61年３月報告書刊行予定。調査者の御教示による。

図　　版

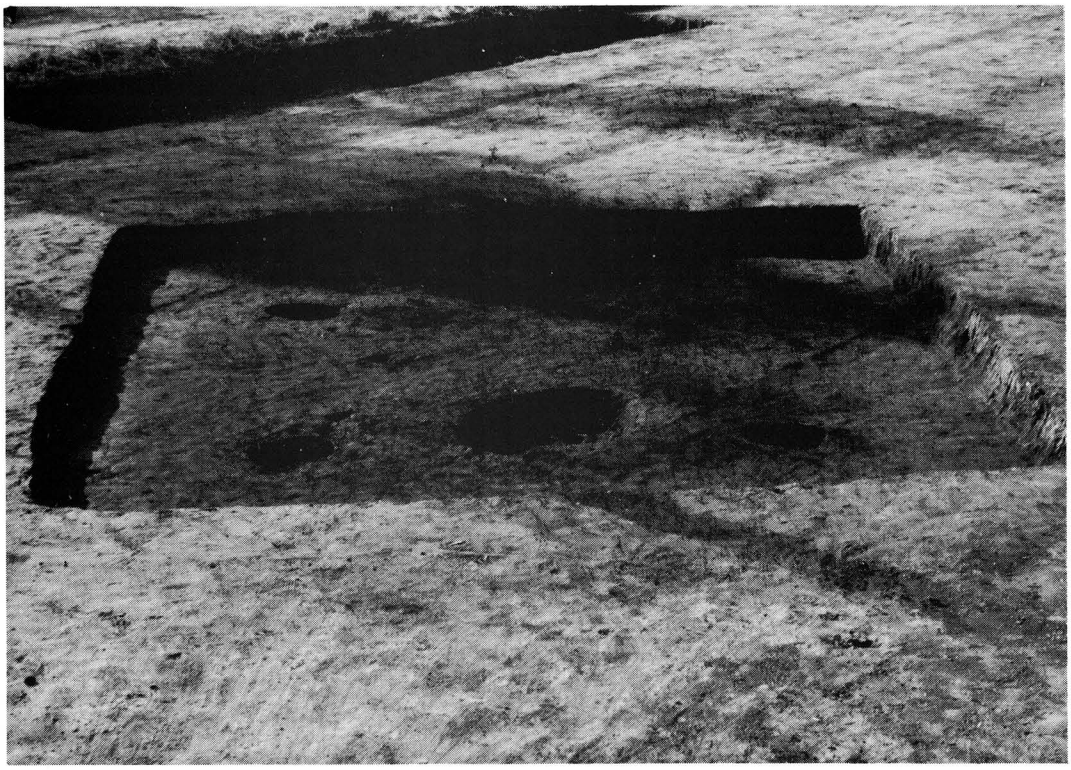
遺　跡　遠　景（南から）

遺　跡　近　景（東から）

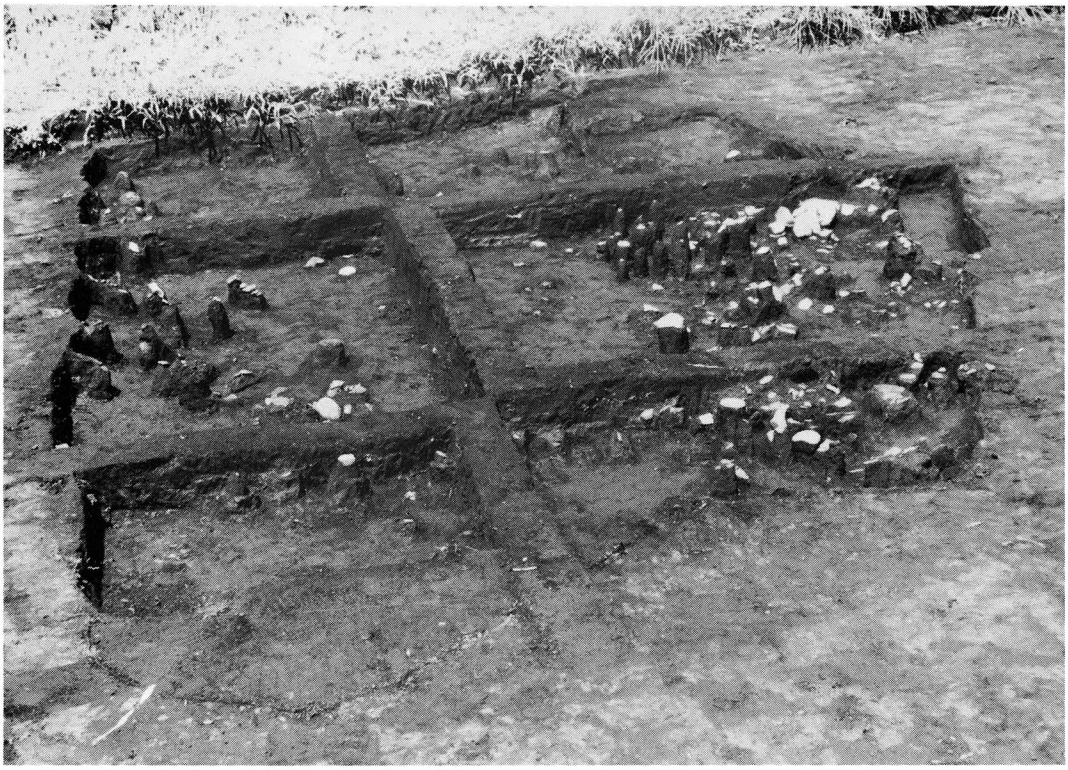
図版 2



Ⅰ号住居跡　遺物出土状況



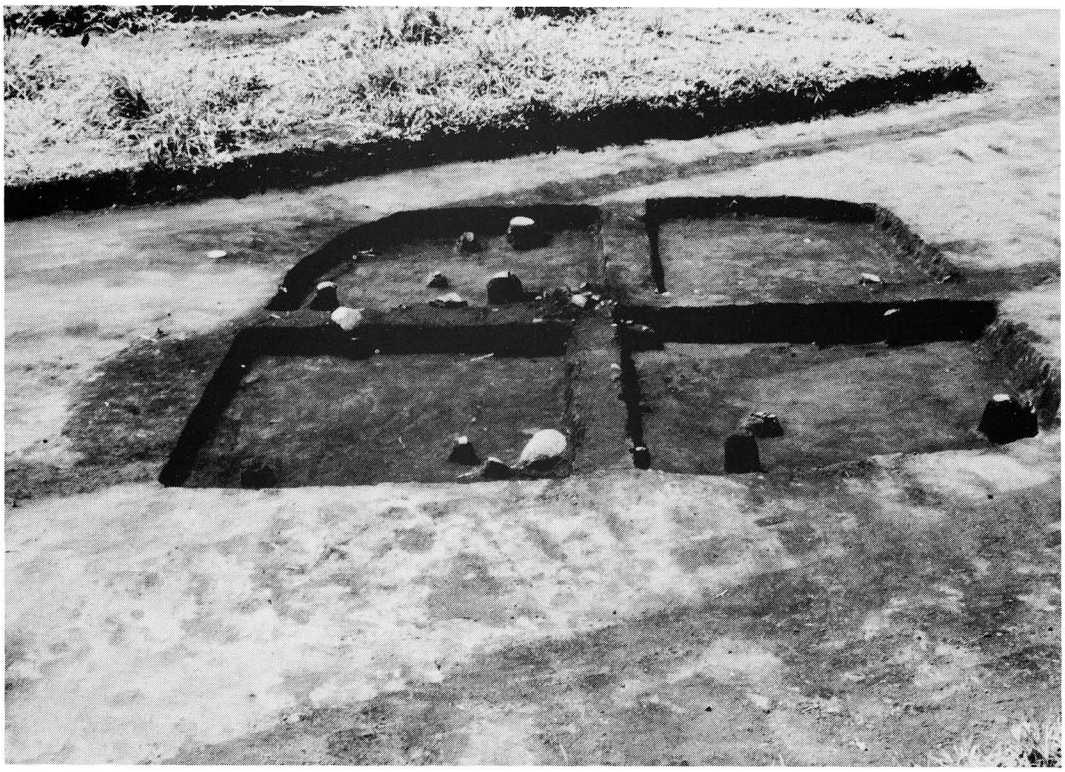
Ⅰ　号　住　居　跡



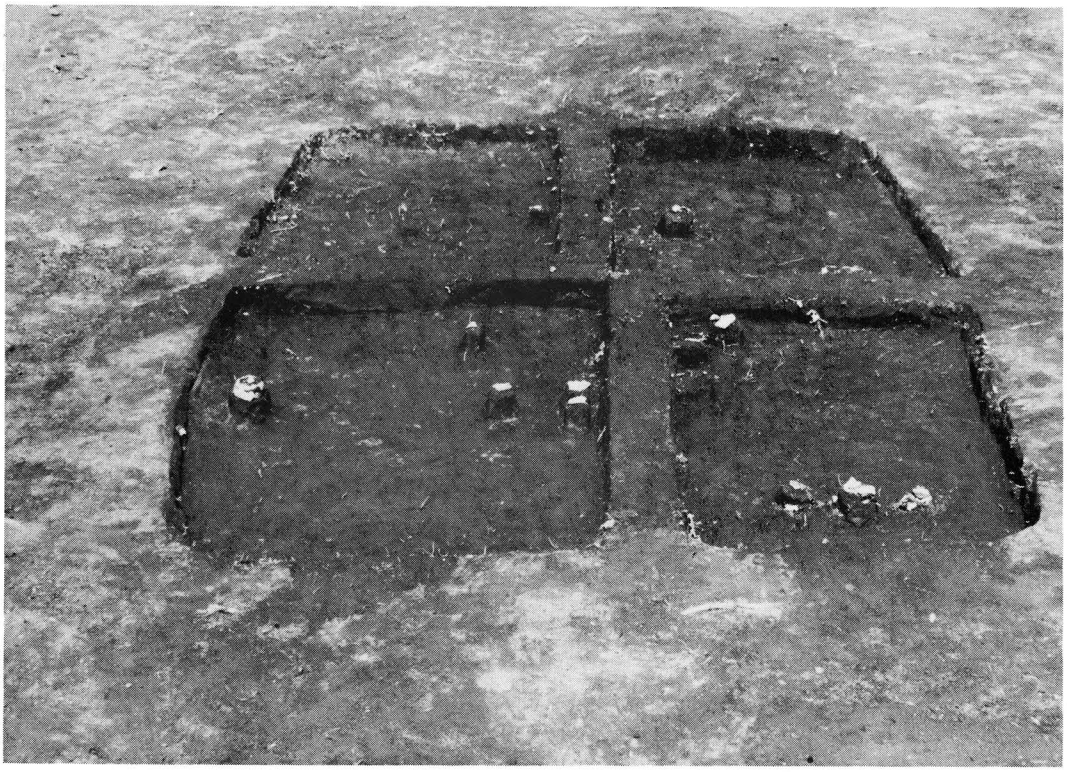
2号住居跡　遺物出土状況

2　号　住　居　跡

図版 4



3 号 住 居 跡



4 号 住 居 跡

5号住居跡　遺物出土状況

5　号　住　居　跡

図版 6

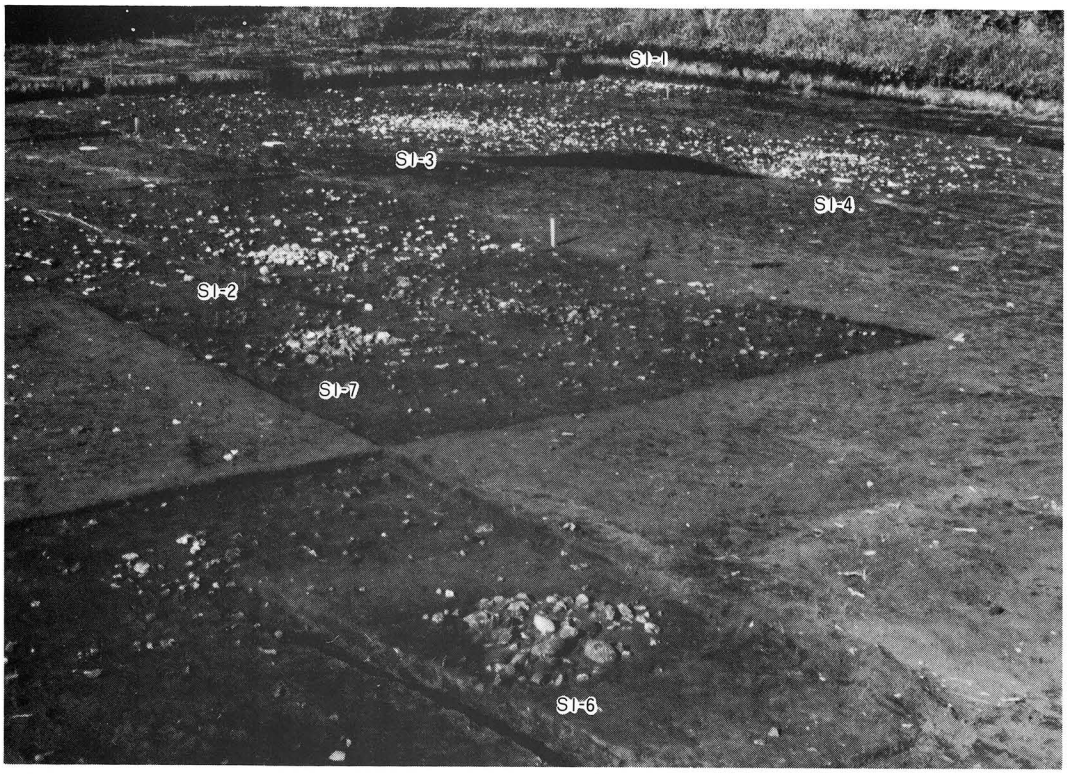
溝状遺構（SE-1）遺物出土状況

溝 状 遺 構（SE-1）

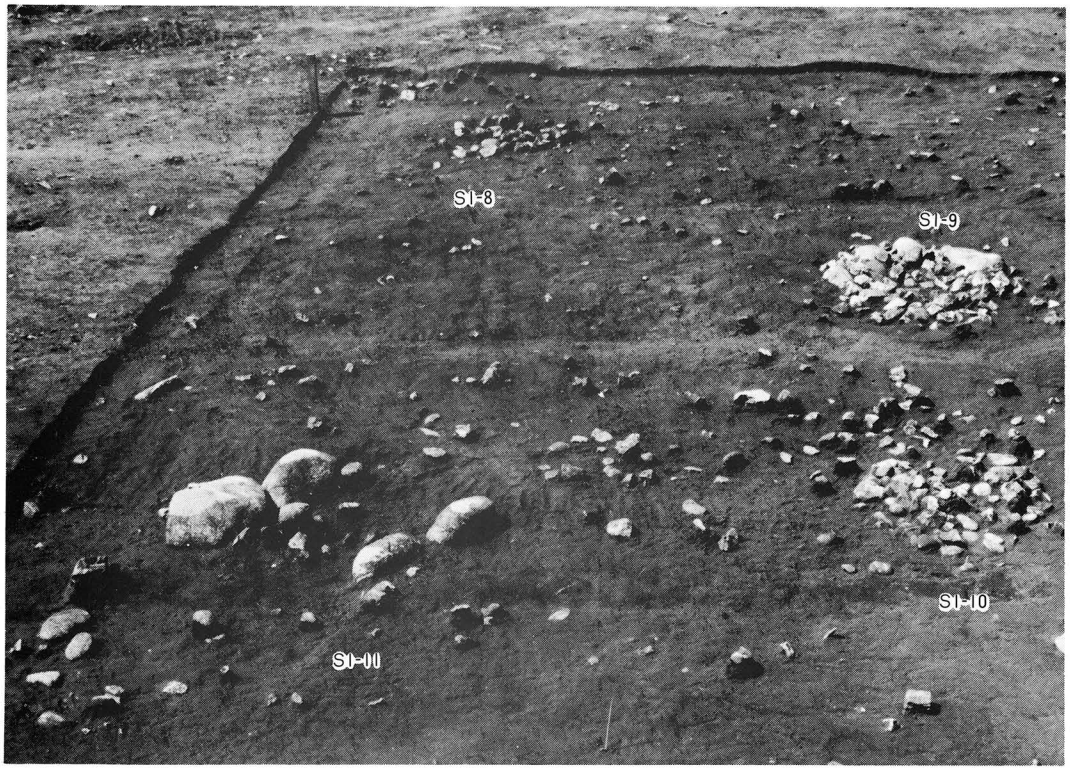
溝 状 遺 構（SE-2）

56 号 墳 周 溝（北側）

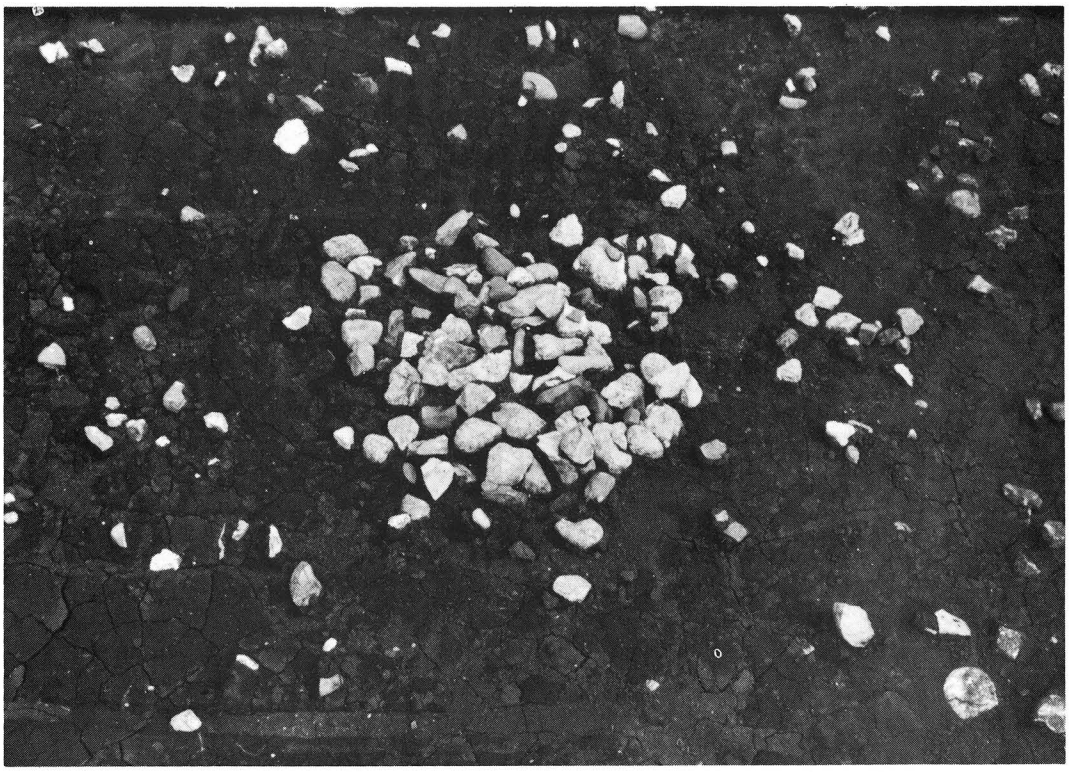
図版 8



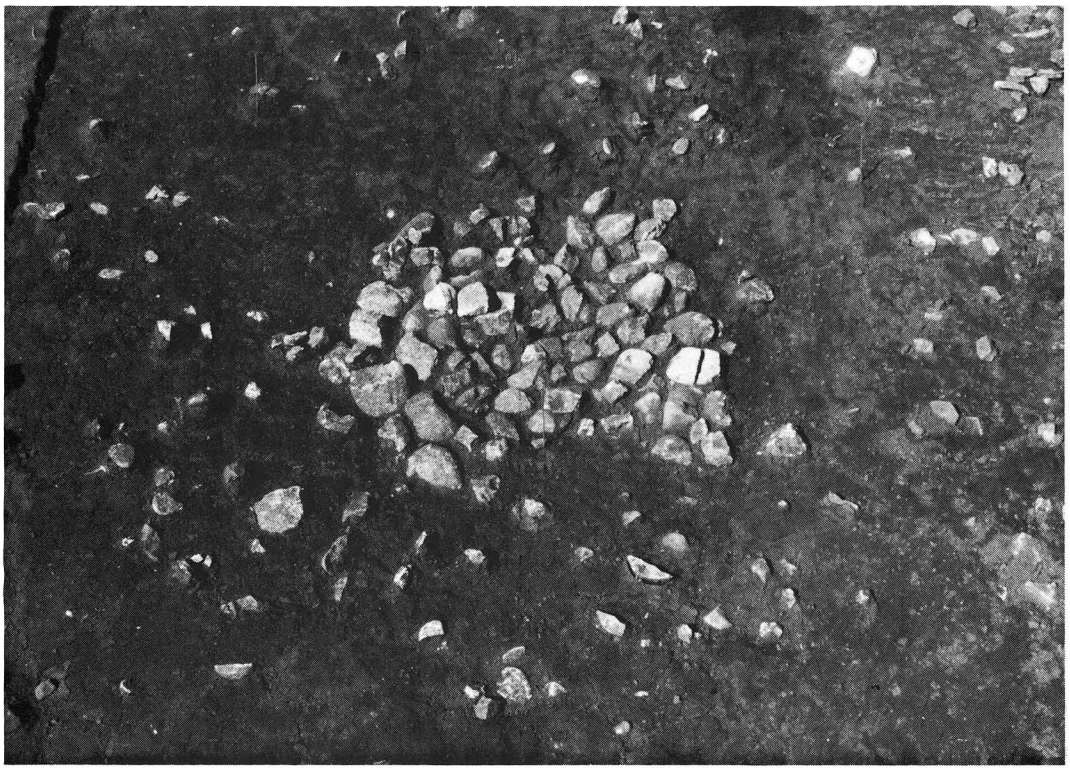
集石遺構分布状況（b-5区，c-3・4区，d-3区）



集石遺構分布状況（d-4区）



2 号 集 石 (SI-2)



7 号 集 石 (SI-7)

図版 10

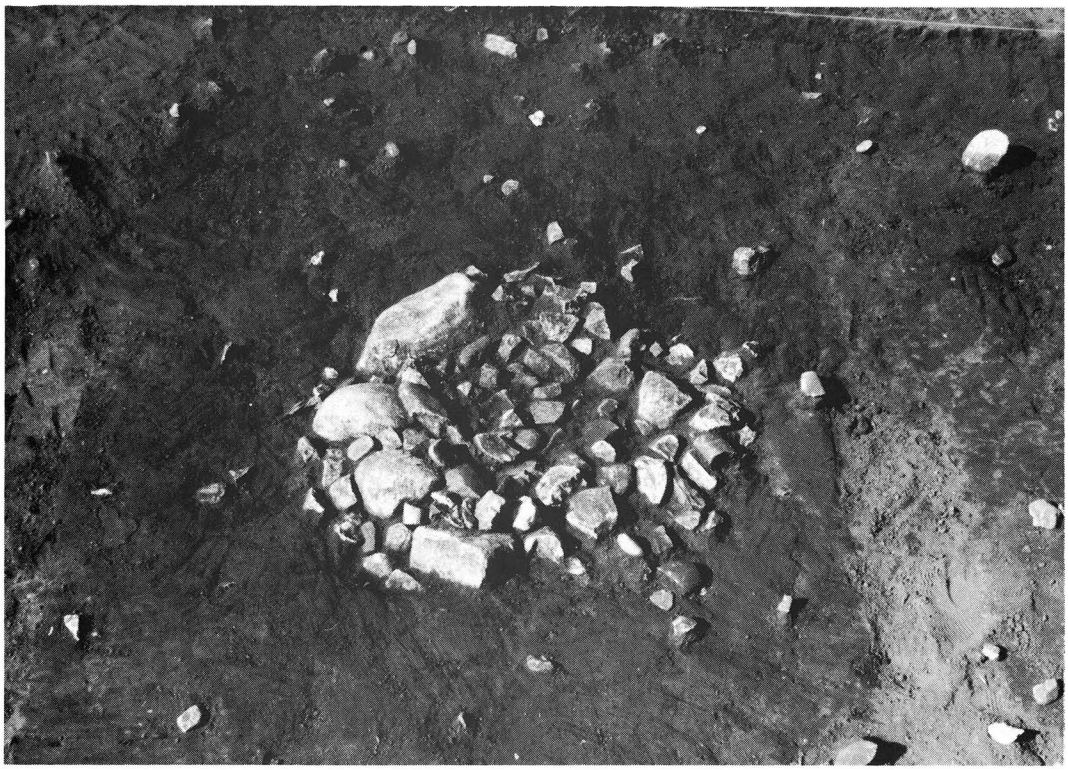
3 号 集 石（SI-3）

3号集石　焼石堆積状況

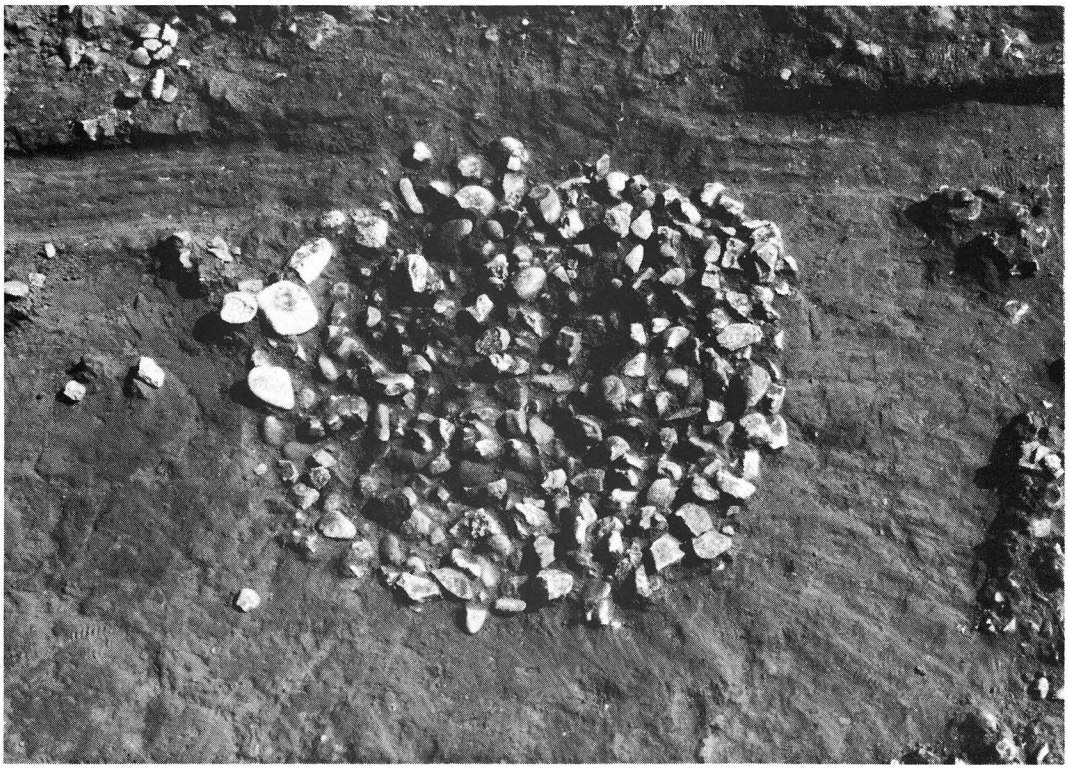
6 号 集 石 (SI-6)

6 号集石　焼石堆積状況

図版 12



9 号 集 石 (SI-9)

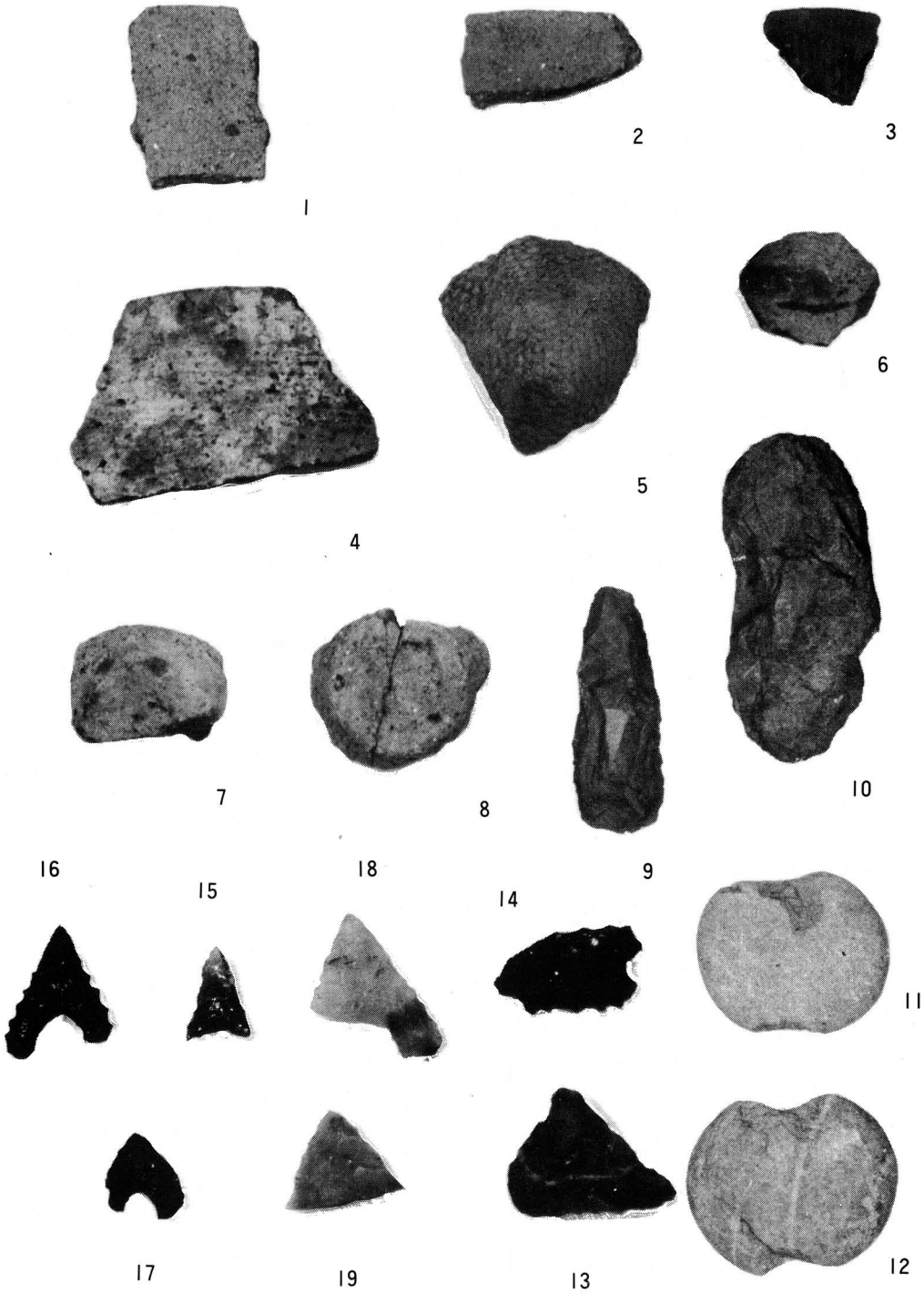


17 号 集 石 (SI-17)

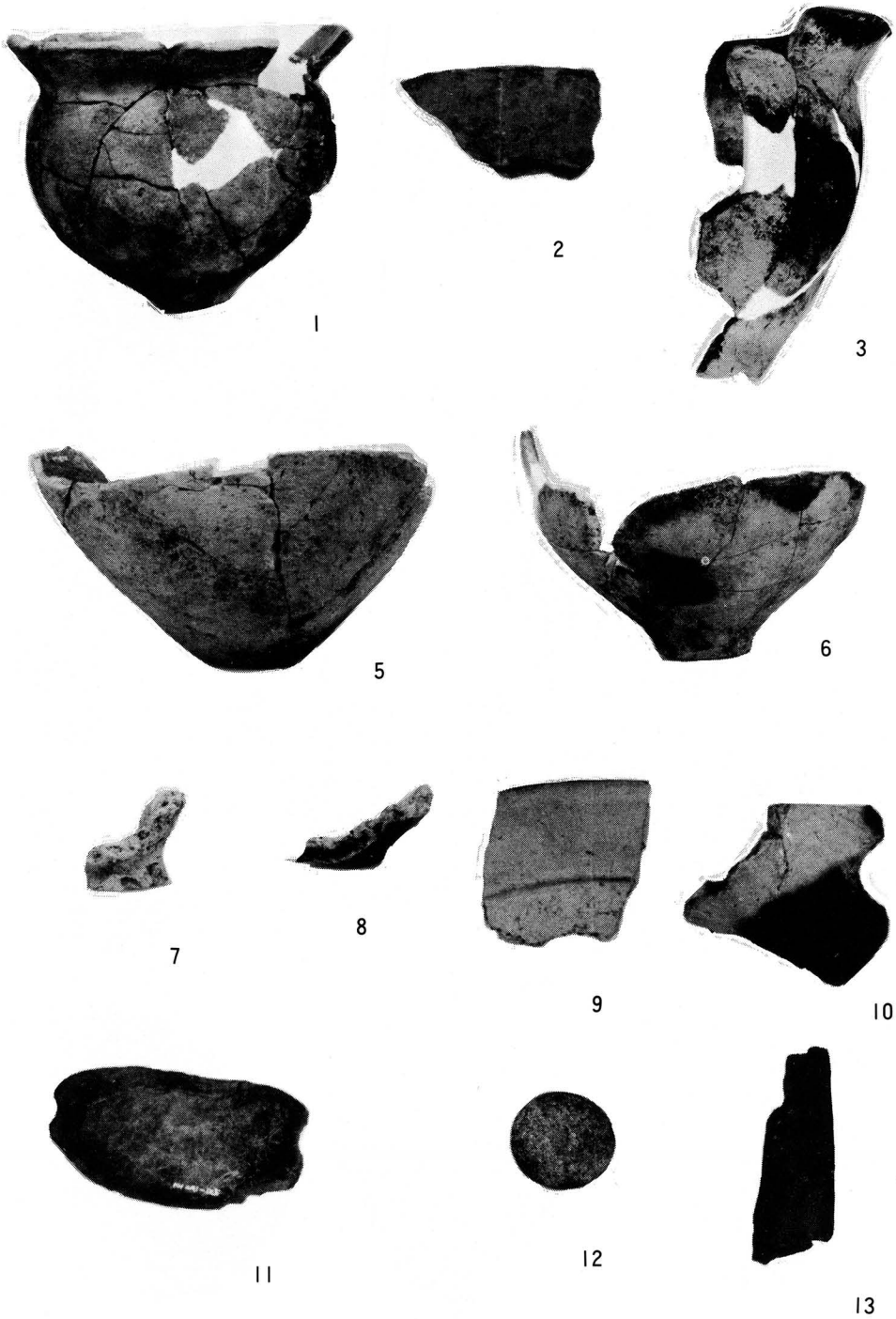
1 号配石（SI-11） 左上 SI-14, 右上 SI-15

2 号配石（SI-12）

図版 14

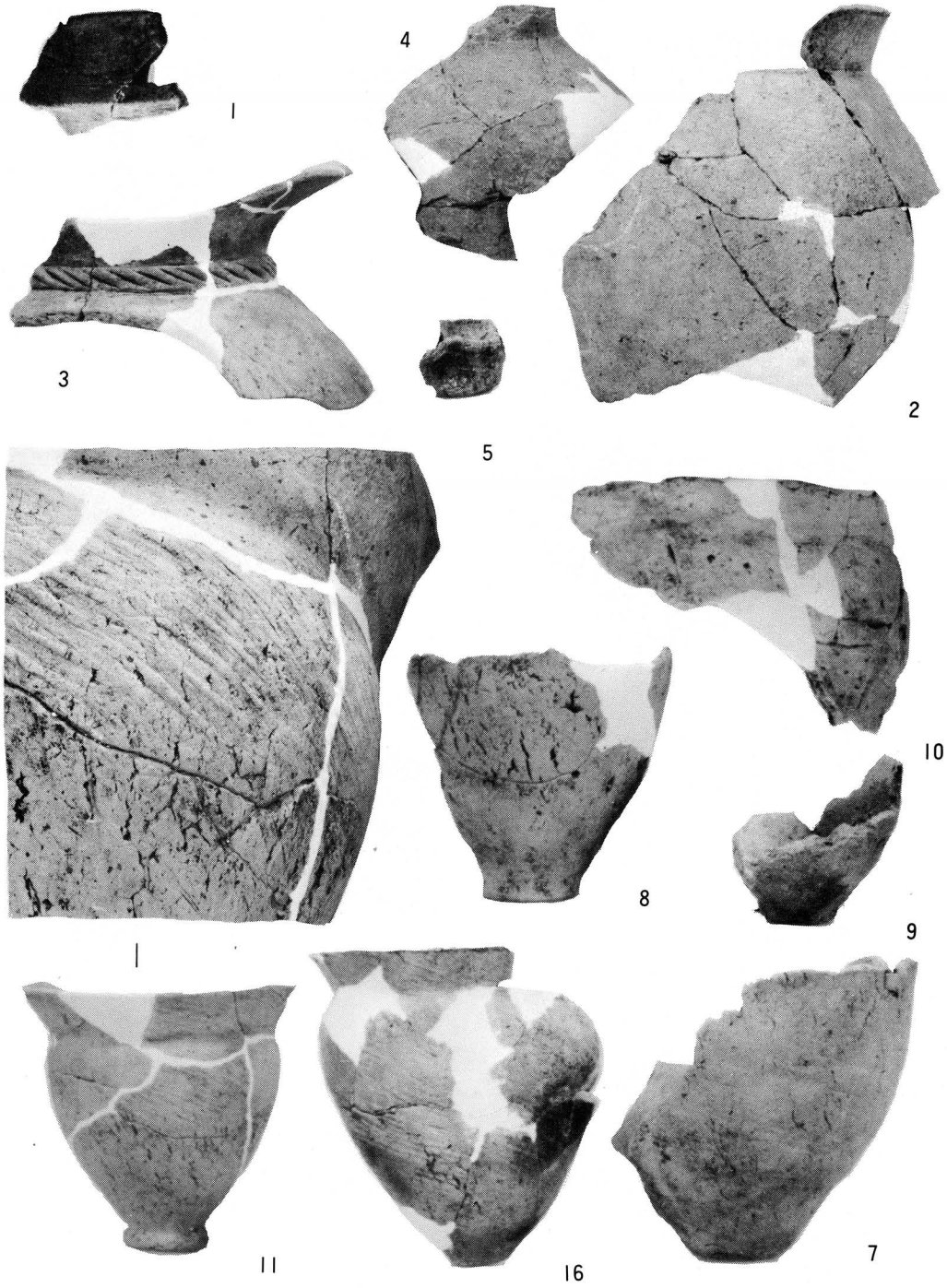


縄文時代出土遺物

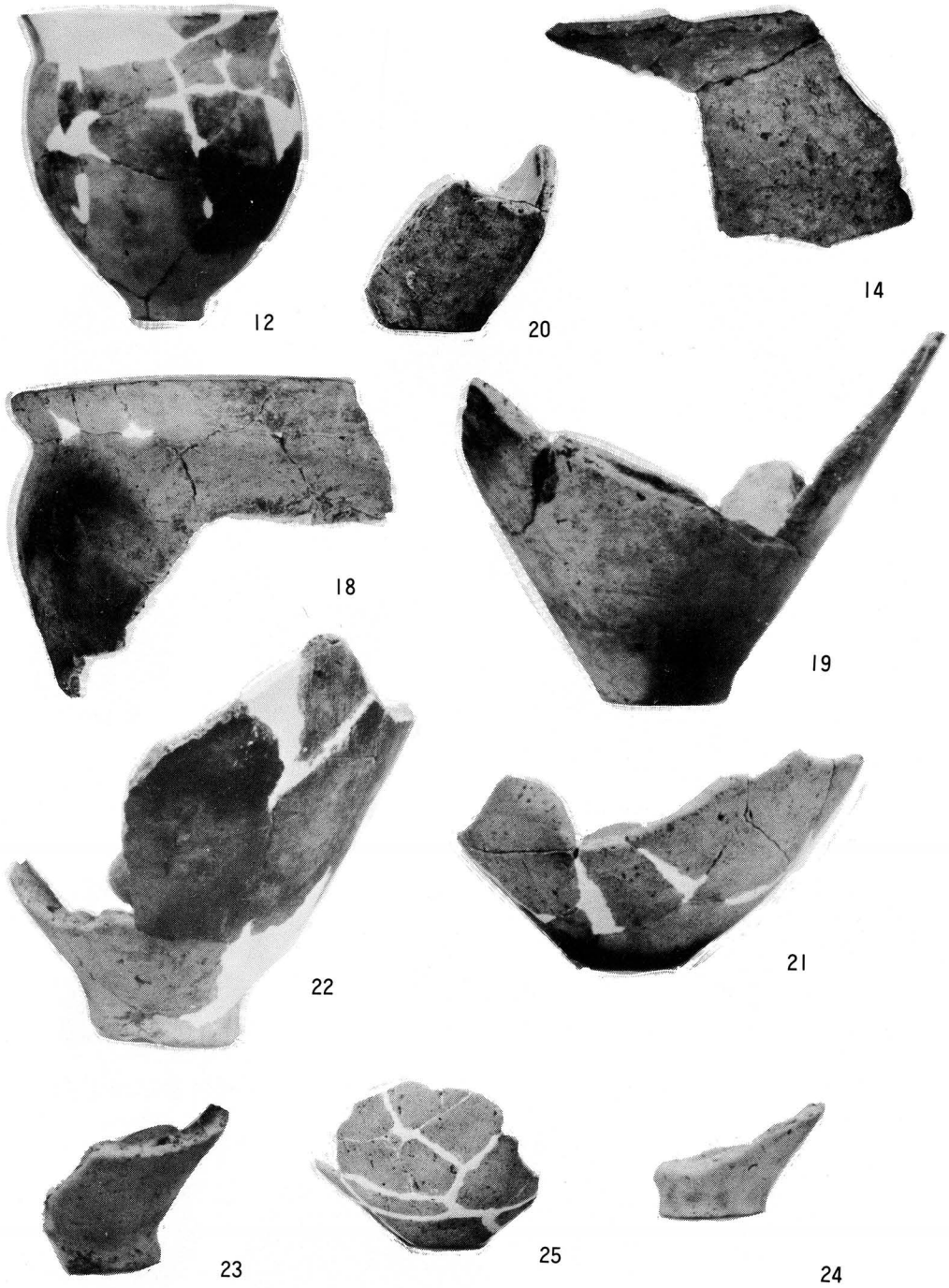


1号住居跡出土遺物

図版 16

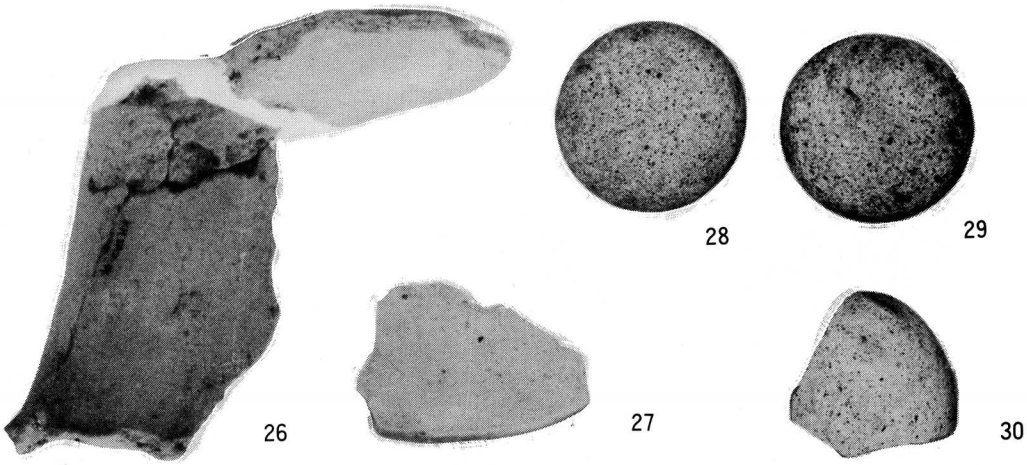


2号住居跡出土遺物(1)

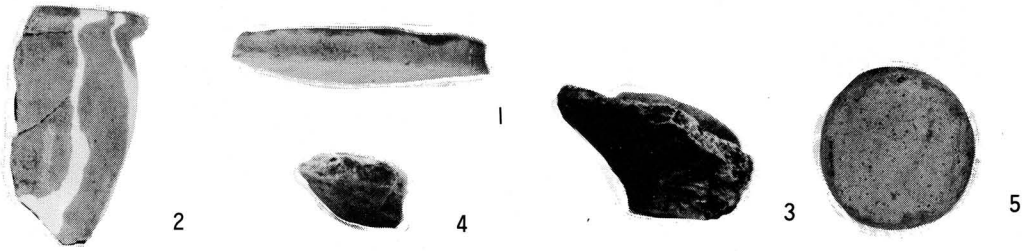


2号住居跡出土遺物(2)

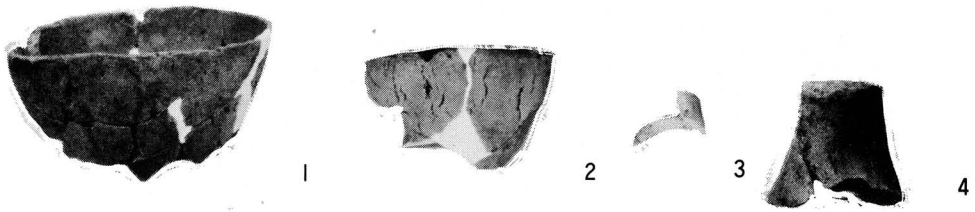
図版 18



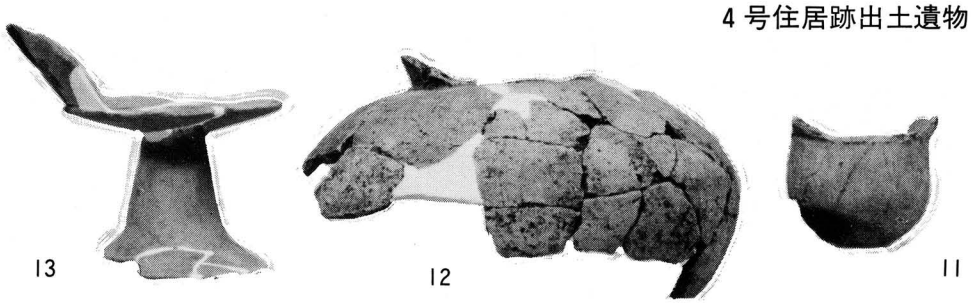
2 号住居跡出土遺物(3)



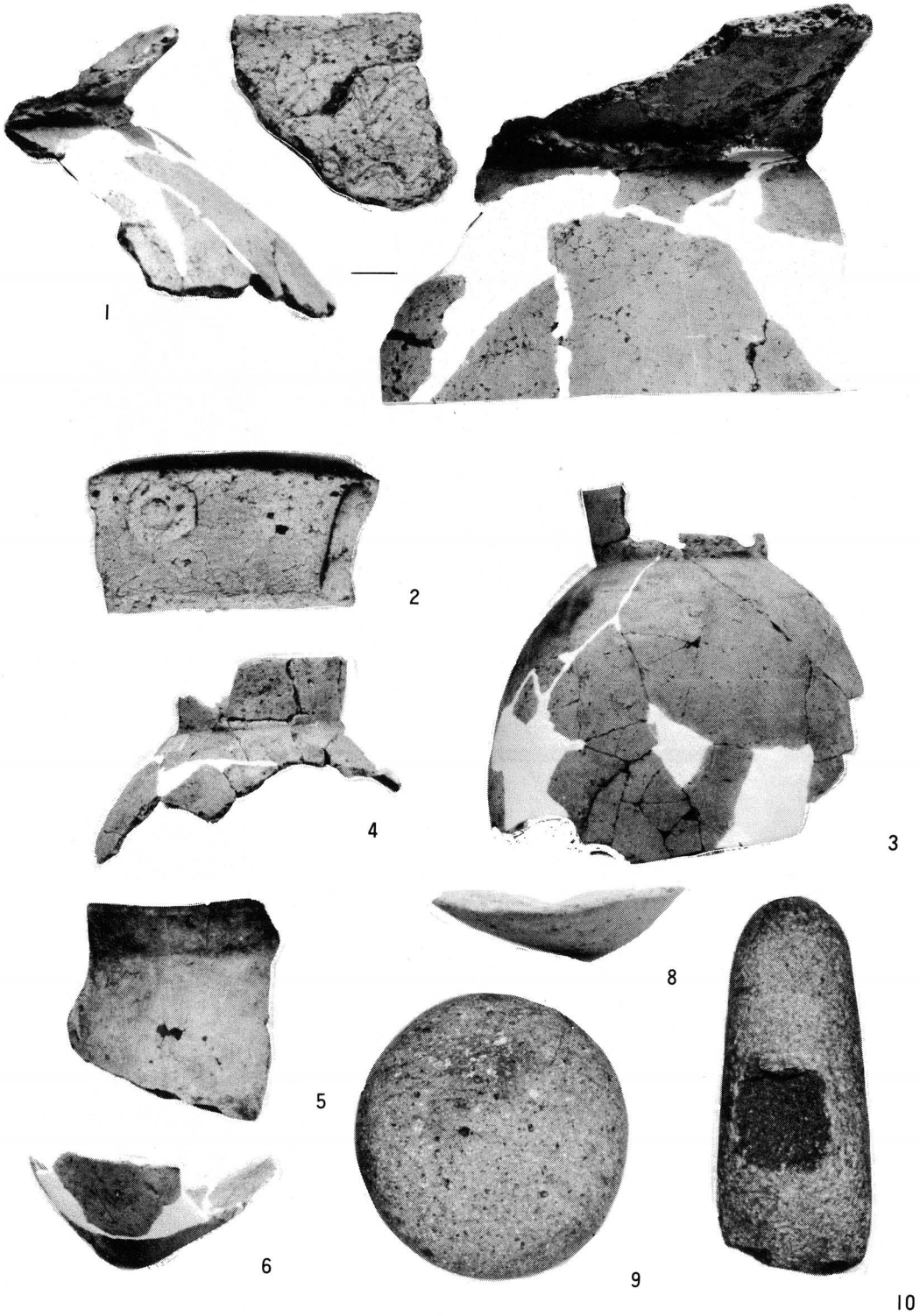
3 号住居跡出土遺物



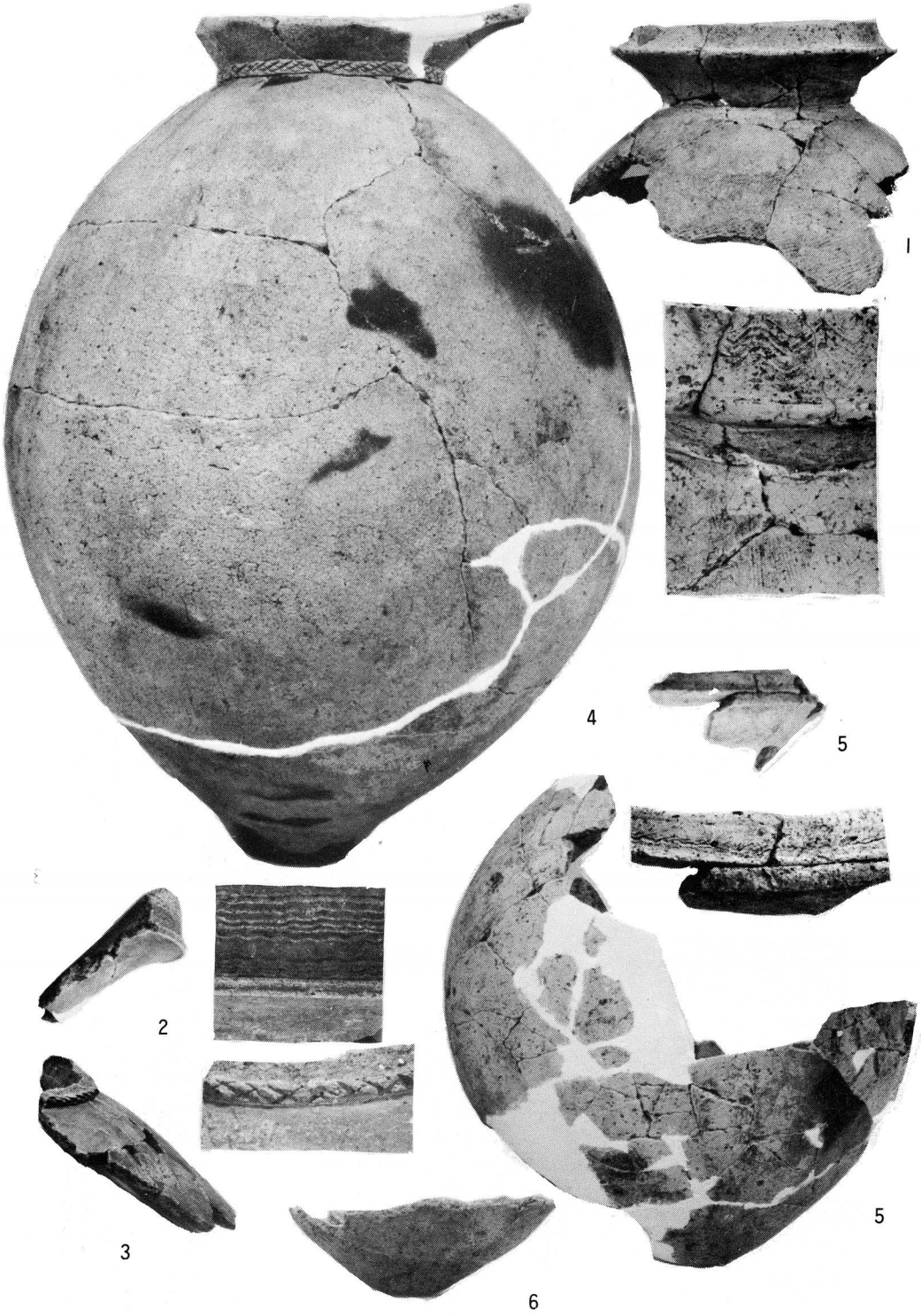
4 号住居跡出土遺物



溝状遺構（SE-2）出土遺物



5号住居跡出土および周辺出土遺物



溝状遺構（SE-1）出土遺物

川南町文化財調査報告 4

上ノ原遺跡

昭和61年3月31日

編集・発行　宮崎県川南町教育委員会

印　　刷　（有）尾形印刷